
いちごいちえ

南文堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちごいちえ

【Nコード】

N0073S

【作者名】

南文堂

【あらすじ】

誰も命は限りあるもの。一瞬、一瞬がかけがえない時間のはず。そんな大切な時をいかに過ごすか……。

自分の死期を知ってしまった少女は、残された時間で何ができるのか考えていた。

【（仮）机上空想工房より転載】

第1話 健康優良児の憂鬱

テレビの天気予報士が梅雨前線の話題を取り上げて、見慣れた半円と三角のくつついた万国旗のような線が北上、南下と忙しく説明していた。しかし、結局のところ、天気は雨というたった一言で終わってしまう。そんな季節のこと。

うつとらしい長雨が上がり、久々に見る太陽のまぶしさに美津紀^{みつぎ}は目を細めた。

五月の連休明けから体調がいまひとつで、最初は「五月病だろう？」と家族はみな笑っていた。美津紀も「ひどい家族」といいつつ、自分も笑っていた。

というのも、保育園年少組から中学二年の今まで無遅刻無早退無欠席、インフルエンザによる公欠もなしの完全無欠の皆勤賞をとっている健康優良少女であったので、自分の健康にはかなりの自信を持っていた。おおかた、連休に行った家族旅行の疲れが出ただけとたかをくくっていた。

しかし、一向に倦怠感が抜けないので親戚の伯父が勤めている病院で検査をしてもらったのであった。そして、今日がその検査結果を聞きに行く日であった。

「まったく、せつかくの土曜日でこんなに晴れているのに病院に行くなんてついてないわよ」

美津紀は中学二年の歳相応な幼さの残る頬を少し膨らませて文句を言った。

「結果を聞くだけなんだからすぐに終わるわよ。終わったら、お父さんも一緒だから食事に行きましょう」

彼女の母親は苦笑しながら膨れた娘をなだめた。

たかだか検査の結果を聞くだけに家族そろってお出かけなど恥ずかしかったが、外で食事というのは美津紀にとってうれしかった。しかも、前から気になっていたシティーホテルのランチバイキ

ングである。その有名パティシエのイチゴを使った新作ケーキはクラスメイトの間でも噂になっている。

「あ。お姉ちゃん、よだれ垂れてるよ」

「え？」

美津紀は弟の指摘に思わず、口元に手を当てた。当然、よだれなど垂れているわけがない。花も恥らう乙女がそんな醜態を無意識でも晒すはずがなかった。

美津紀は偽の指摘をした弟をきつと、にらみつけた。しかし、生意気盛りの彼女の弟は「やーい、ひっかかった」という笑顔を返している。

「カツアキ！」

美津紀は姉の威厳を保つために弟を怒鳴ったが、あまり効果があるとは言えなかった。それがまた彼女の癪に障り、姉弟げんかに発展しようとしたちょうどその時、絶妙のタイミングで母親の一言が飛んだ。

「いい加減にしなさい、二人とも！ そんなんじゃ、お昼は抜きよ」

鶴の一声。まさにそれであった。二人はおとなしく矛先を納めて、表面上仲良く病院へと向かった。

「こんな元気な病人がどこにいるんだろうね」

父親があきれたように苦笑した。その言葉に母親が「まったくね」と相槌を打って笑いあっていた。

二重になった自動ドアを潜り抜けると、外の湿度九十パーセントの世界とは別世界が広がっていた。快適な温度湿度がコントロールされた待合室はじっとり汗ばんだ身体には少し寒かったが、その冷たさが少し心地よかった。

基本的に紹介状がなければ診察してくれない地域の中心的総合病院であったため、待合室にいる人間もまばらで、少しのんびりした空気が流れていた。土曜日の診療は基本、予約した人間だけであり、今は昼前なこともあり、新たに診察を受けに来る人間はほとんどお

らず、会計を待っている人が何人かいるぐらいであった。待合室に人が少ないことは美津紀を安心させた。

（もし、友達のお父さん、お母さんに会ったら、心配されちゃうもの）

美津紀は健康が何より一番の取り柄というのが彼女の友人の間での共通認識だった。本当は成績も良く、学年上位に常連で入っているし、顔もかわいい。性格も明るく友達も多い。面倒見がいいためか、友人たちの間ではリーダー的な存在でもあった。しかし、友人が彼女を最初に評すのは『元気娘』『健康優良少女』であった。

本人は「もつと他にあるでしょうが」と文句をいつているが、本心ではそういわれる事は嫌ではなかった。

その彼女が病院に行つたとなれば、友達が必要以上に心配するだろうことも予想の範囲内であった。

（健康優良少女も辛いよ）

美津紀は冗談めかして気障っぽくため息をついた。検査の結果を聞きに来てはいる割にはお気楽なものである。

本当のところ、体がだるいのは確かだったが、今ではほとんど元に戻っている。時々、不意に疲れが来るのがつたが、すぐに復活していた。心配性の父親が伯父に相談して、あまりに心配するので伯父も仕方なく、自分の勤めている病院へ紹介状を書いたというわけである。

（『おとうさんは心配性』ってギャグ漫画があつたけど、あんな変態お父さんにならないかしら？ 心配だな）

美津紀はマニアックな漫画を思い出しつつ、名前を呼ばれるのを待った。

人が少ない割には、呼ばれるまでに時間がかかった。余裕を持って診察の予約時間前に来ているので、待たされるのはしょうがなかった。暇をもてあました美津紀は隣に座っている家族を見た。

弟の勝昭は雑誌コーナーにおいてある漫画雑誌に夢中で読んでいた。かつあき数週前のだが、読み飛ばしてしまつたらしく、雑誌を見つけて

喜んでいた。母親は女性雑誌を読んでいる。韓国の有名スターの裏話に食いついてしまったようだった。ああなると、鍋を焦がしても気がつかない集中力を発揮する。父親は家で取っていない新聞を吟味している。また、新聞を変えるための検討をしているのかもしれない。父親は新聞を変えるのが趣味のようになっていた。

どこにでもいる、ごく平凡な家族。美津紀は不意にその平凡さが心に染みて、急に胸が熱くなった。

「ともさか みつき様。友坂美津紀様」

名前を呼ばれて、はっとした美津紀は自分が泣いていないか確認してから立ち上がった。しかし、家族の誰も立ち上がろうとしない。「お父さん、新聞読みにきたんじゃないでしょ。お母さんも、どうせ、その雑誌、帰りに買っしょ？ カツアキもいい加減にしないさ」

美津紀は一緒に来ているながら本来の目的を完全に忘れている家族にあきれて、病院内ではお静かにという標語を無視して大きな声を上げた。彼らにとって健康優良児の美津紀の検査結果など、その程度のものではあった。

父親など、美津紀のことを心配して検査を受けさせておいて、検査を受けたことで安心してしまい、心配が冷めればその程度であった。もつとも、美津紀が普段と全く変わらないのを見ていたので仕方ないといえば、仕方なかったが。

「ともさか みつき様。ともさか みつき様。いらっしやいませんか？」

「あ、はい。すみません」

もう一度、看護師に呼ばれて慌てて返事をして、両親と共に診察室に入ってしまった。弟の勝昭は行っても仕方ないと、待合室で漫画を読み続けることにして、ついてこなかった。

美津紀は診察室に入ると消毒液のにおいが鼻について、ちょっと緊張した顔つきになった。

「おまたせしました、友坂美津紀さん」

温和そうな初老の医師が振り向きながら、美津紀の緊張を解くような笑顔を浮かべた。彼女だけでなく、両親も少し緊張していたのだろう、軽く息を吐く音が聞こえて、美津紀は苦笑した。似たもの親子である。

「ええと、検査の結果は……異常なし。たぶん、季節の変わり目で少し疲れが溜まっているんでしょう。早寝早起きと規則正しい食事と運動をしていれば、よくなりますよ」

医師は笑顔で美津紀の検査結果を伝えた。我知らずに美津紀は思わず、安堵の息を吐いて、慌てて口に手を当てた。

「心配してたんだね。大丈夫だよ」

医師は美津紀の頭を優しくなでた。そんなに子供じゃないと言いたい、そのなでられる感触が心地よくて、言うタイミングを逃してしまった。我に返ったときには既になでられ終わった後である。

「先生、セクハラですよ」

何も言わないのは悔しいと美津紀は拗ねるように言ってみた。本気でないのは誰の目にも明らかである。

「美津紀！ 先生に失礼でしょう」

それでも母親は世間知らずの自分の娘を戒めるようにぴしりと叱った。

「いやいや、これはレディーに対して私が失礼でした。お許しください、ミス・トモサカ」

医師は見かけによらず、優美な仕草で気品溢れる本物の英国紳士のように美津紀に謝罪した。それがまるで映画のワンシーンのようで、美津紀は少し頬を高潮させ、映画のように返す言葉を搜した。

「いいえ、わかってくだされば結構ですよ、ドクター・カドマツ」
陳腐な台詞だが、小市民家庭の中学二年女子ではこれが平均限度一杯だろう。医師もにこやかに笑って、それに応えた。

「それじゃあ、あなたの体調を早く回復するために、お父さん、お母さんに必要な栄養を含んだ食事のメニューなどを教えておきまし

よう。ということで、マドモアゼルには少しばかり、席を外していただいてよろしいでしょうか？」

診察室の奥から笑いを堪えながら美津紀のよく知る顔が現れた。「笑わないでよ、伯父さん。似合わないのはわかってますよーだ」

美津紀はそう言つて、勢い良く立ち上がり、出て行こうとした。しかし、その前にふっと目の前が真っ白になり、前後上下があやふやになった。

「倒れる」

美津紀はパニックになり身を硬くしたが、誰かが自分の身体を支えてくれた。倒れるのを免れたと、ほっと息を吐いて体の力を抜いた。そのうちに視界が戻り、父親が心配そうな顔でしっかりと美津紀を支えているのが目に入った。

「ありがとう、お父さん」

美津紀はなんとか平衡感覚が戻ったことを恐る恐る確認しながら、父親から身を離れた。

「まったく、気をつけろよ。美津紀はそそっかしいところが、母さんに似てるんだから」

「お父さん。それはちよつと聞き捨てならないわね」

「きゅ、急に立ち上がるから、立ちくらみになるんだ。気をつけなさい」

母親に睨まれて父親は急遽話題を変え、美津紀に注意した。

「はい、気をつけます」

美津紀は立ちくらみを起こしてこけそうになるという失態をうやむやにしたくて、そそくさと診察室を出ていった。

第2話 盗み聞きの代償

美津紀が待合室に戻ると弟の勝昭はまだ漫画雑誌を読みふけていた。診察前から読んでいるのにとあって、覗き込むと読んだことがあるはずの号を読んでいた。どうやら、前のを読んで続きが読みたくなったのだろう。熱心なことだと感心ししつつ、自分も何か暇つぶしの雑誌を探そうとマガジンラックを覗き込んだ。

「あんまり、読みたいのが無いな―」

主婦層が読むような週刊誌や小さな子供が読むような絵本の他は、勝昭が読んでいる少年漫画しかなかった。

美津紀は仕方なく、待合室のソファ―に腰を下ろして、周囲を見渡した。美津紀にとって病院というのは来慣れていないだけに珍しさもあるが、それ以上に居心地の悪さを感じて仕方なかった。早く帰りたいが、両親が医師と話があるので待つていなければならぬ。

「あ、そうだ。由貴にメールしておかなきゃ」

そう思っ、自分の携帯を探してズボンのポケットをまさぐったが、見当たらなかった。

「そういえば、お母さんのバッグの中だった」

美津紀は病院内では携帯の電源を切るという常識的なマナーを守り、もし追加で診察することになってもいいように、ポケットに入らずに母親のバッグの中に入れたことを思い出した。

「外で使うし、いいよね？」

誰とはなしに独り言で確認すると、美津紀は両親のいるはずの診察室に戻った。しかし、診察室には両親も、医師の門松と伯父もおらず、看護師が忙しそうに診察に使う器具の準備をしていた。

「あの、すいません。門松先生はどちらに行かれました？」

美津紀は自分の主治医の居場所を聞くのが一番の近道と頭をめぐらして、看護師に声を掛けた。

「あれ？ 門松先生は廊下の突き当り、第三会議室に行きましたよ。」

カンファレンスすると言ったから急いでいったほうがいいわよ」

看護師は自分の手元から視線を外さず、主治医の居場所を美津紀に教えた。

「ありがとうございます」

美津紀は看護師に一礼すると、廊下を迷惑にならないように急いだ。カンファレンスの意味がわからなかったが、急いだ方がよさそうなことはわかった。

会議室には表札があったので、美津紀にもすぐに見つけられた。中から彼女の両親の声が聞こえるので、間違いようもない。その声がなにやら大きな声だったが、美津紀は迷わず、そっとドアを開いた。携帯を貰うだけだから、母親だけ呼び出せば事足りる。何か大事な話をしているのかもしれないから、邪魔してはいけないと彼女なりに気を使ったのであった。

日ごろのメンテナンスがいいのか、ドアは音もなく開いて、美津紀は部屋の中に滑り込んだ。ついたてがあるので、ドアが開いて入ってきて彼女の姿は中の人には見えない。美津紀はそっと、母親だけ呼び出そうとついたてから顔を覗かせようとした。その時

「冗談にもほどがありますよ、義兄さん」

険悪な父親の声に美津紀の体が硬直した。

「こんな悪趣味な冗談がいえるか」

なにやら、父親と伯父が言い争っている。二人の声の後ろには母親の嗚咽が聞こえて、美津紀の頭は少しパニックになった。

「兄さん。お願いだから、お願いだから嘘と言って。間違いと言って」

母親の狂いそうな声が聞こえて、美津紀の鼓動が早くなった。

（なんだろう？　すごくイヤ）

美津紀は心臓を押さえつけるように胸に手を当てた。やっと膨らみかけたやや遅い成長の胸が強く押されて痛んだが、そうしないと心臓が飛び出すかもしれないと痛みを無視した。

「残念ですが、友坂さん。検査の結果は変わりません。お嬢さんは

珍しい血液の病気にかかっております。余命は長くて三ヶ月ほどかと思われます」

先ほどの温かみのある初老の医師の声がまるで、かみそりのように冷たく部屋に響いた。

母親はその宣告に再び大泣きした。

「治療法は？ 治療法はあるんだろ？ 今の医学は発達している。なあ、義兄さん」

「すまない」

「すまない？ なんだよ、それ」

「この病気の治療は今の医学では不可能なんだ。症例自体が世界でも百例もないんだ。しかも、子供の症例は数例あるだけ。治癒例は無い。死亡率は……百パーセントだ」

「じよ、冗談じゃない！ あの子はあんなに元気じゃないか！ 死亡率百パーセント？ 何かの間違いに決まってる」

「残念ですが、本当です。延命に有効と思われる薬はあるのですが、その薬は抗がん剤の一種で、国内で認可されていない副作用の強いものです」

「副作用が強くても、治るなら」

初老の医師の声が父親の声をさえぎった。

「治る事はありません。上手く効いても延命は一ヶ月程度なのです。効かないケースも多い。しかも」

「投与した時に、へたすれば投薬のショックで死んでしまう。特に子供は！ 何もできないんだよ」

机を激しく叩く音が聞こえた。悲しいその音に美津紀は心が引き裂かれそうになった。

（なんなの？ 一体、何の話？）

「そんな、あんまりよ。あの子はまだ、十四年しか生きてないのよ。それなのに、それなのに……美津紀が、美津紀があと三ヶ月の命なんて」

母親の慟哭が会議室を満たし、美津紀の胸に突き刺さった。

「うそ、でしょ？」

美津紀は隠れていたはずなのに、いつの間にかついたてからふらふらと歩み出ていた。

「美津紀！」

八つの目が驚きと絶望と困惑とに揺れながら彼女に注がれた。美津紀はそんな視線を全く感じずに、自分の視線もあやふやになりつつ、夢遊病者のように彼らの近づいた。

「うそ、よね？ 三ヶ月なんて」

「美津紀……ちゃん」

「うそよね？ さつき、異常なしって言ったじゃない」

「美津紀ちゃん」

「うそだよな？ そんなことないわよね？ だって、あたし、健康よ。ほら、どこも痛くない。どこも悪くない。ねえ、見て。見てよ。ちゃんと診てよ。どこも悪くないんだから！」

最後はなんだかわからない叫びになっていた。しかし、四人の大人は誰も美津紀と目をあわそうとしなかった。それが答えであった。美津紀は膝が震えるのを感じた。立っているのが難しい。だが、このままここで崩れ落ちたら、さつき聞いたことを認めてしまう気がして、わけもわからず部屋の外へ飛び出した。

「美津紀！」

彼女を後ろで呼ぶ声が聞こえるが、振り返らずに全力で駆けていった。

「あ、お姉ちゃん。お父さん、お母さん、遅いね。まだかかるって、お姉ちゃん？」

待合室で漫画を読み終わった弟の呼びかけを無視して病院の外へと飛び出していった。

第3話 夜明け前

梅雨明けするには少し早いが、ここ数日、いい天気が続いていた。空梅雨というわけではなく、梅雨の中休みで、週末には再び雨になるというのが天気予報であった。

世間の主婦たちはその中休みの間にと、忙しく庭やベランダに洗濯物の白い花を咲かせていた。

しかし、美津紀の部屋は明るい日光を拒むように硬くカーテンで閉ざされ、電気もつけられていなかった。

もし、カーテンがあいていたら、電気がついていたら、その惨状に誰もが息を飲んだだろう。クッションやぬいぐるみのようなものが部屋の中に散乱し、一部は引き裂かれて、中の綿がはみ出して部屋に舞い散ってあった。綺麗に並べられるはずの本はめちゃくちゃに床に散らばり、その間に小物が散乱している。まるで、部屋の中を台風が通過したような、そんな散らかりようであった。

その部屋の壁際に置かれたベッドの上でシートにくるまり、小さく身を固めていた少女がいた。少し頬の痩せた顔色が悪い少女で、生気がまるで感じられなかった。だが、目だけは異様に光を放っていた。世の中全てを憎んでいる。そんな目をしていた。

「なんで、あたしだけ……」

ベッドの上の少女、美津紀はそれまで幾度も繰り返された呟きをまた繰り返した。

別の病院で検査してもらったが、結果は同じであった。

美津紀の病気は末期になるまでおそろしく病気の進行が遅い。そのため、自覚症状は死の数日前まで全くといっていいほど無いのが特徴らしい。末期になって自覚症状が出てから検査をして、病名が判明すると同時に亡くなるケースも珍しくなかった。

緩やかに進行し、ある一点を超えると一気に死に突き進む。その一点がいつくるのか、はつきりわからない。病気に気が付いてしま

つたら、いつ死ぬかわからない恐怖に襲われる。悪魔のような病気である。医師たちの言っている三ヶ月もはつきり言っと、あまりあてにできないものであった。

しかし、美津紀にとって、その三ヶ月が、四ヶ月でも二ヶ月でも変わりにはなかった。迫り来る死という絶望が間近であることは変わりないのである。

病気がほぼ間違いないと知り、一時は自殺すらも考えたが、結局それはしなかった。

病気に負けてなるものかという気持ちよりも、面倒だったという方が強かった。そんな事をしなくても、どうせ死ねんだから。美津紀は自殺を心配した両親に乾いた笑いでそう答えていた。

恐怖に怯えて自暴自棄になり、周囲につらく当り散らした。だが、ひとしきり暴れると、そのたびに虚しさだけが募る。自分がどんなに暴れようが叫ぼうが、近づいてくる死は止まることはない。湧き上がる虚しさが心を蝕み、恐怖が膨らみ、また振り出しに戻る。

あの日以来、地獄に続く螺旋階段を駆け下りるように、負のループを繰り返し、心をすり減らしていた。

美津紀の目に涙が滲んだ。

「なんでよ？ もう、涙は枯れたと思っていたのに」

彼女はシャツに顔をうずめて、低い嗚咽を漏らした。

数日後、何をするわけでもなく、美津紀は壁に身体を預けて、部屋を見ていた。

あれほど荒れ果てた部屋は綺麗に片付けられていた。母親が掃除してくれたのである。暴れたのは数日前が最後だった。あとは生気が抜けた人形のように言われるがまま動き、食べて、寝ていた。

「もう、何もしたくない」

美津紀はそう思っていたが、だんだんと死が近づいている事を思い出すと、それがとても怖ろしく感じるようになってきた。

「このまま、あたし、死んだら、何もしないで死んだことになる」

この世に生きた証を何も残さずに消えていく。感情でもなんでもなく、本能的に背筋が凍った。

「なにかしなきゃ」

そう焦ったが、自分に残された時間で何ができるのかと考えると「あと二ヶ月で何ができるのよ?」

せせら笑う自分が現れる。結局、何もできないような気がして何もできず、貴重な時間だけが過ぎていった。

「もういいや」

そう思う心と

「何かしなきゃ」

と思う心が交互に浮いては沈み、沈んでは浮き、美津紀の心の中は以前にもまして荒れていた。

美津紀はその日も何をするわけでもなく、心の中に嵐を抱えたまま部屋の窓から外を眺めていた。

そんな彼女の家の前を一人の少年が楽しそうにスコップを担ぎながら通り過ぎようとしていた。泥で汚れたジャージを穿いて、昨日の雨のせいで蒸し蒸しした暑い日なのに長袖のシャツを着ていた。

しかも、ご丁寧には首にはタオルを巻いて、麦藁帽子を背中に下げている。その姿はお世辞にも格好よくなかった。その少年も格好いいとは思っていないだろうが、そんな事は気にしていないふうである。

美津紀はその少年を知っていた。小学校低学年までよく一緒に遊んだ、幼馴染みだった。小学校のクラスが変わって、女子は女子、男子は男子で固まるようになって、あまり遊ばなくなった。家が近すぎて、年賀状も交換しない。よく知っているはずなのに、ほとんど知らない男の子　遠野耕太。
「コウちゃん」

美津紀は思わず、窓を開けて、その少年を昔呼んでいた名で呼んだ。

耕太は突然懐かしい呼び名で呼ばれて、驚いて立ち止まった。彼はきよろきよると周囲を見渡したが道には人影がない。ふと、彼女

の家を見上げて、美津紀を見つけて少し驚いた顔をしたが、すぐに人懐っこい笑顔を浮かべた。

「いま、僕を呼んだのって、友坂さん？」

「なにしてるの？ スコップなんて持つて」

美津紀は自分でもびつくりするくらい明るい声で耕太に問いかけた。彼の笑顔がそうさせた。彼はあまりハンサムではないが、昔から笑顔がかわいい。人を和ませてくれる笑顔をする。女子の間でも母性本能をくすぐると密かな人気があった。

「うん。学校のバラ園を世話してるんだ。学校のスコップは、今日はドブ掃除に使うから一本もなくて。仕方ないから、おじいちゃんの家から借りてきたんだよ」

担いでいたスコップを軽く上げた。かなり使い込まれていたが、手入れが行き届いていて、太陽の光を眩しく反射した。

「バラ園？ そんなのあったっけ？」

「あるよ。ほら、南側の池があるだろ？ その横の災害備蓄倉庫の向こう」

耕太は真つ当な学校生活をしているかぎり、行く事はまずない場所を口にした。美津紀は記憶の糸を手繰り寄せるが、バラ園などしやれたものと一致する風景は思い浮かばなかった。

「あんなところに？ でも、花壇はあったような気がするけど、バラ園だったの？」

「ずいぶんと長い間、手入れをしてないからね。花壇に見えたなら、まだましな時だったんだね」

耕太は苦笑してその認識を認めた。彼が手入れを始めた時はゴミ捨て場と思ったほどの荒れようだった。忘れ去られる場所なのに不良の溜まり場にならなかったのは、体育教官室が近かったという偶然のおかげにほかならなかった。

「コウちゃんって、バラ好きだったっけ？」

美津紀は小首を傾げた。確かに、小学校の時も朝顔を他の誰よりも大きく立派に育てて、いっぱい花を咲かせたり、園芸が好きとい

う、小さな男の子にしては変わった趣味ではあったのは知っていた。しかし、バラが好きというのはイメージになかった。どちらかというと、清楚な花が好きなイメージがあった。

「うーん、どつちかというと、あんまり」

耕太は困ったように彼女の質問に答えた。

「え？　じゃあ、なんで？　先生にでも押し付けられたの？」

「ちがうよ。自主的にやっているんだ。先生には許可してもらったんだ」

窓から身体を乗り出す美津紀にあぶないと手振りで止めた。彼女は自分が二階の窓から話していることを思い出して、乗り出した身体を部屋の中へと引つ込めた。

それを見て安心した耕太は話を続けた。

「バラは匂いがきついし、なんだか派手だから、僕の好みじゃないんだけどね。でも、みんなで見るのは楽しい花だから。ほら、なんていっても華やかだろ？　それに、いい匂いがするからみんな見に来るし。せつかく、学校にバラ園があるんだし、もったいないんだろ？　バラだって、綺麗に咲いてみんなに見て欲しいとおもっているだろうしね」

耕太は好みではないといいつつ、楽しそうに語った。

「そうなんだ」

美津紀は彼の屈託のない笑顔が眩しく見えて仕方なかった。まるで今の季節の太陽のように思えた。

「うん。それじゃあ、またね」

彼は話を切り上げて歩き出そうとした。そのとき、美津紀はなんだか置いていかれる気がした。そして、その途端、頭の奥に何か光が差し込んだ。

「待って！　あたしも手伝う！」

美津紀は再び窓から身を乗り出して耕太を呼び止めた。

「え？」

「いいでしょ？　それともだめ？」

驚いて振り向いた耕太に美津紀はできるだけかわいらしく、精一杯媚びるようにお願いした。それが通用したかどうかは、耕太の顔が夏の暑さ以外で赤くなつた事で証明されていた。

「いいけど、あんまり楽しくはないよ。疲れるし、土で汚れるし、虫だっているし」

花を育てるのは綺麗で楽しい事ばかりではない事を知っている耕太は暗い顔をした。嫌になつて途中で投げ出されるのはいいが、それで園芸を嫌いになられるのは悲しい。

「む、虫?! …… はあんまり好きじゃないけど……」

美津紀はうぞうぞとはいまわる虫を想像して、少し顔を引きつらせたが、そんな事で引き下がるわけにはいかない。

「だけど、ちゃんとするから。いいでしょ? 一生のお願い」

美津紀は両手を合わせて耕太に頼み込んだ。一生。という言葉を使った時、ちくりと胸が痛んだが、もうそれは振り返らない事にした。

「うん。そんなにいうんなら、いいよ。イヤになったら、やめてもいいし」

一度言い出すと聞かない性格を知る幼馴染みは、彼女の変わらない性格に嬉しさ半分、苦笑い半分でバラ園再生委員会の入会を認めた。ちなみに現在のところ、会員は二人である。

「そんなことない。友坂美津紀に二言はないわよ。死ぬまでちゃんと手伝つてあげる」

「へいへい。大げさだな。それじゃあ、汚れてもいい服に着替えておいでよ。待つてるから」

二階の窓際で胸を張っている美津紀に笑いながら、耕太は担いでいたスコップを降ろした。

「うん、すぐに行くから、待つてね、コウちゃん」

第4話 幼馴染といつもの朝と

せわしなく美津紀は部屋の中に消えると、どたばたと音を立てて準備しているのを耕太はのんびり待った。

（そういえば、なんか病気でここ最近、学校休んでるって聞いたけど、治ったのかな？ まあ、あんだけ元気なら治ったんだろうな）

耕太はクラスの女子が話していたことを思い出しながら、ボーっとした。

（でも、コウちゃんなんて呼ばれるのは久しぶりだな）

耕太は美津紀が昔の呼び方で自分を呼ぶのを思い出して、思い出しうれし笑いを浮かべていた。

「なに、にやついてるのよ。コウちゃん」

一人悦に入っているところを呼びかけられて、耕太は驚いてこけそうになった。なんとか、こけるといふ醜態を晒さずにはすんだが、恥ずかしさに顔を赤くした。

呼びかけた美津紀はジャージにトレーナー、頭には麦藁帽子をかぶっていた。お洒落な格好とは程遠いが、やはり女の子である。耕太と同じ格好でも華やいで見えた。

「は、早かったね」

「あんまり待たして、行っちゃったら嫌だから」

美津紀は真剣な顔でそう言うのと耕太は思わず吹き出した。

「僕はそんな意地悪しないよ。じゃあ、行こうか、友坂さん」

耕太はスコップを担ぎ上げ、歩き出そうとした。しかし、美津紀は不満顔で耕太を睨みつけた。

「どうかしたの？ やっぱり、嫌になった？」

耕太は怪訝に思ったが、すぐに理由を思いついて寂しそうに苦笑した。

「違うわよ。友坂さん　なんて、他人行儀に呼ばないで、昔みたいに呼んでよ、コウちゃん」

「え？」

耕太は美津紀の不機嫌の理由が思わぬ事にびっくりして固まった。

「それとも、昔の呼び方忘れちゃったの？」

「お、憶えてるよ、それぐらい」

「じゃあ、呼んでみてよ」

「み、ミツキちゃん……」

美津紀にせかされて、耕太は暑さ以外の理由で喉がからからに渴きそうになった。それでも、喉が渴ききる前になんとか彼女の昔の呼び名を言う事に成功した。

「うん、コウちゃん。これで、最強コンビ復活だね」

美津紀は満面の笑みを浮かべると、片手を高く上げた。耕太は反射的にその手とハイタッチした。ハイタッチは小さい時の二人のお約束であった。

耕太はそのハイタッチで小学二年からさつきまでの、彼女との空白の六年を取り戻したような気分になり、笑いがこみ上げてきておかしくなって笑った。

翌日は朝から小雨が降り出して、うつうつしい天気になっていた。梅雨だからとはいえ、じめじめしたこの季節を喜ぶのは力エルぐらいなものだろう。もっとも、雨が降らなければ、降らないで、空梅雨で水不足と心配するのだが。

いくらうつうつしい天気でも朝がくれば一日が動き出す。友坂家もそれは変わりなかった。

昨日は久々に明るい美津紀を見ることができて、両親は涙をこらえるのに必死だったし、弟も昔の姉が返ってきたとはしゃいでいたが、今日も昨日のままである保障はない。両親と弟は変な緊張を朝の食卓に漂わせていた。

「お姉ちゃん、やつぱり、起きてこないね」

小学生の弟、勝昭が食卓に朝食だけが並んで空席となっている椅子を見ながら独り言のように呟いた。

「だれが起きてこないって？ カツアキ」

「お、お姉ちゃん！」

食卓のある居間に姿をあらわした美津紀に家族全員が目を見くした。別に変な格好をしているわけではない。普通に学校指定のセーラー服を着て、朝の支度を済ませた、ごく普通の、数週間前までの彼女の朝の姿であった。

「美津紀、あなた……」

母親は口を手を当てたまま目を見開いて涙を溜めた。父親も何かを我慢するかのように口をつぐんでいた。

「ごめんね。お母さん、お父さん、それに、カツアキ」

美津紀は何か吹っ切れたような笑顔を浮かべた。

「美津紀……」

「今日から、学校に行くから。あたし、一生懸命、生きていこうと思っ」

「美津紀……」

「ほらほら、朝から湿っぱいのは天気だけで充分だぞ。早く食べないと、遅刻しちゃうわよ」

しんみりする食卓を明るくしようと、美津紀がはしゃぐような声で朝食を急かした。母親は耐え切れずに背を向けて肩を震わせていた。父親も何も言えずに朝食を口に運ぶ事しかできなかった。ただ一人、一番歳下の勝昭だけが、彼女に向かって笑顔を見せた。

「よかったね、お姉ちゃん」

その言葉で父親の目からは堰を切ったように涙があふれ、母親は堪えていた嗚咽を漏らした。勝昭も目に涙を浮かべている。もちろん、美津紀の目からも光るものが零れ落ちた。

第5話 夏に咲くバラ

美津紀は学校に復帰し、クラスメイトたちに明るく迎えられた。彼女の病気は学校にだけ報せてあるだけで、生徒には報せないようにと彼女と彼女の家族が望んだのであった。

「でも、美津紀が貧血なんてびっくりだよ」

登校してしばらくは病み上がりを中心に心配していたクラスメイトも、いつもと変わらぬ美津紀の様子に緊張を解いて、今では冗談まじりに彼女の病欠をネタにしていた。

「ほんとほんと。貧血なんて薄幸の美少女にぴったりの病気なのに」「ひっどーい。それじゃあ、あたしが薄幸の美少女じゃないみたいじゃない」

美津紀は頬を膨らませた。学校を休んだ理由は、急性の貧血症で入院ということになっていた。

「美津紀は薄幸の美少女というより、明朗快活元気印だもんね」

「もうっ、みんなして。それでも、かよくて繊細でナイーブなガラスのように壊れやすい乙女チックな心の持主なのよ」

「自分で言ってる段階でそれはないって」

「ふーんだ」

むくれる美津紀にクラスメイトが笑い声を上げた。美津紀も同じように笑った。正直まだ少し笑うのは辛かった。でも、以前のように笑えないわけじゃなかった。

（コウちゃんと毎日、放課後過ごしているからかな？）

あの日以来、美津紀は病院に行かなければならない日を除いて、ほとんど毎日、耕太と放課後を一緒に過ごしていた。彼の笑顔は美津紀の心を見るみる明るく解きほぐしていった。

「乙女チックといえば、聞いたわよ。美津紀、B組の遠野君と付き合ってるんだって？ 退院そうそうやってくれるわね」

「なっ！ そ、そんなじゃないって」

耕太のことを思い出したときにタイミングよく聞かれて美津紀は明らかに狼狽した。

「照れるな、このつ。毎日放課後、校庭の片隅に仲良くしけこんでるって、ネタは上がってんだ」

「あ、あれは……」

「まあ、二人揃ってジャージ姿でほつかむりじゃあ、ロマンも何もないけどね。土いじりしながら恋の炎を燃え上がらせるなんて難しそうだもんね」

「でも、遠野君らしいよね。なんだかほのぼの」

「いえてる」

「もう、違うつて！ 遠野君とは幼馴染で、バラ園を復活させるのを手伝っているだけよ」

「はいはい」

美津紀は彼女の言うとおり、耕太の作業を手伝っているだけであつた。園芸の初心者で力もさほどない彼女にたいした事はできなかったが、一人いるといたないでは作業の進み具合が格段に違っていた。最初は廃墟と変わりないバラ園は徐々に本来の姿を取り戻してきていた。

美津紀はその様子を見るのが楽しくて仕方なかった。

「だけど、明日から夏休みか。一杯遊ぶぞ！ 美津紀、夏休みはどうすんの？ どこかに遊びに行こうよ」

クラスメイトの一人が明日から始まるロングバケーションに心を躍らせて、美津紀を遊びに誘った。

「うーん、お医者さんに大人しくしておくように言われてるの。もう、平気なんだけど、再発すると厄介だからって。プールも駄目だしね」

美津紀はすまなそうにクラスメイトに謝った。クラスメイトたちは逆に美津紀があまり遊べないことを可哀想がっていた。

運動することで病状が悪化することは報告されていないが、医者としては入院して安静にしてくれることを願っていた。だが、完治

の見込みのほばない患者に効くかどうかわからない治療を押し付けるのは、一クオリティー・オブ・ライフ《人生の質》を考えればできず、病状が悪化しない限り定期的な通院で済ませていたのであった。

「でもさ、彼氏持ちなんだからいいじゃん。プールにいけないのは遠野君が残念がるだろうけど」

「だから、彼氏じゃないって」

美津紀は否定したが、周りはそれを信用せずに、やっかみ半分でそれをネタに終業式が始まるまでずいぶんと盛り上がった。

「もちろん、夏休みもするのよね？ バラ園の世話」

終業式が終わって、美津紀はいつものように耕太の作業を手伝いながら訊いた。

「うん、そのつもりだけど無理しなくていいよ。来れる時だけで十分だよ、ミツキちゃん」

「冗談じゃないわよ。最初にいったでしょ。ちゃんと手伝うって」

美津紀はムツとした顔で耕太を睨みつけた。もつとも、睨まれた方は嬉しそうに笑っていたので、睨んだ効果は無かったが。

「うん。ありがとう。助かるよ、ミツキちゃん」

「あたしはしたくてしてるんだから、コウちゃんにお礼言われる筋合いはないわよ」

屈託のない顔でお礼を言われて、美津紀は思わず顔を赤らめた。

（もう！ みんながあんな事言うから、なんだか照れくさくなっちゃうじゃない）

黙って顔をそらしている美津紀に耕太は別のことで照れているのだと勘違いし、のほほんとした笑顔を浮かべていた。

「はいはい。わかってるよ。でも、一番綺麗に咲いたのはミツキちゃんのものだよ。それぐらいさせてよね」

耕太の言葉に美津紀は照れるのを止めて、気づかれないように唇を軽くかんだ。

「バラって、確か、咲くのは秋よね……？」

「ん？ 秋まで待てないなんて、ミツキちゃんらしいね」

耕太は幼馴染みの気の短さをおかしそうに笑った。

「ち、違いわよ。あたしはただ……そう。二学期にみんなが登校して来たときにバラが咲いてたらいいなって思っただけよ」

耕太の勘違いを正すわけにもいかず、美津紀は適当な嘘の言い訳を口にした。嘘だったが、口にして、それもいいなと思ったので完全に嘘とは言えないと自分に言い聞かせた。

「そうだね……確かにいいよね。実を言うとな。あそこのバラは夏の終わりに咲く予定なんだよ」

耕太はバラ園の一角を指差した。

「え？ 本当？」

「うん。この種類は四季咲きって言って、本当は春から秋に咲きつづけるんだけどね。手入れをしてなかったから三番花を咲かせなくなっただよ。でも、ちゃんと土を調べ、水をあげて、肥料をやったから、今年は多分、夏休みが終わる頃に咲き始めると思うよ」

充分に成長したバラは種類にもよるが、春から秋にかけて剪定や追肥など条件を整えると何度も花を咲かせる四季咲き性という性質を持っている。耕太は美津紀が手伝い始める少し前の六月中旬ごろに花がら摘みを行っていたので、次に咲くのは八月中旬から下旬と彼は予想していた。

「本当？」

真剣な目で詰め寄る美津紀にちよつとびつくりしながら耕太は頷いた。

「絶対とは言えないけど、ちゃんと世話したら、多分」

三番花はかなり好条件でないと咲かないこともあり、不安はあったが、頷かないわけにはいかない迫力が美津紀にあった。

「じゃあ、じゃあさあ。最初に咲いたバラの花、あたしにちょうだい」

「いいよ、それぐらい。でも、最初に咲くのは色とかよくないかも

しないよ」

耕太は一番をもらいたがる美津紀が昔と変わらないと思わず微笑んで、後で文句を言われないうちに忠告した。

「いいの。あたしはそれで」

美津紀は妙に透き通った声でそう答え、耕太はその声に胸の奥を掴まれるような錯覚を感じて動揺した。

「ま、まあ、いいよ。じゃあ、ミツキちゃんには一番最初に咲いたのと、一番綺麗に咲いたのをあげるよ」

耕太は自分の動揺を隠すように冗談めかして美津紀に約束した。

「ありがとう、コウちゃん。でも、いいのかな？ 学校のことを勝手にあげる相手を決めて」

美津紀はふと、優等生らしく規則の事が気になった。

「世話をしているんだから、それぐらいのご褒美はくれてもいいと思うよ。それに、この肥料とか薬とか、苗とか僕の自腹だし」

「ええっ！ 学校のじゃないの？」

美津紀は耕太の告白に目を丸くした。美津紀が知っているだけでも、これまでにすぎ込んだそれらの量はなかなかのものである。中学二年のお小遣いではかなりの負担だろう。

「クラブ活動じゃないし、僕の趣味みたいなものだからね。学校にただで場所を貸してもらっていると思えば大した事ないよ」

確かにこれほどの面積を借りようと思えば、かなりのお金がかかる。耕太はちゃんと、バラ園の脇に自分の花壇を作って自分の好きな花を植えていた。

「でも、お小遣い足りなくなって兄ちゃんに借りてるんだけどね」

耕太は強がりと言ったけど、実はかなり苦しいと本音を漏らした。

「あたしも」
「だーめ。ミツキちゃんの植えたい花があつたら、それはミツキちゃんがお金を出せばいいけど、これは僕がやりたくてやり始めたものだから」

美津紀が何か言うより先に耕太が彼女の言おうとしていた事を言

えなくした。

「でも、あたしもしたいからしてるんだよ。仲間外れにしないでよ」
目に涙を溜めて訴えられ、耕太はその涙に驚いて情けないほどどう
るたえた。

「な、泣かないでよ、ミツキちゃん。そんなことで仲間外れにしない
って。ねえ」

「でも、でも……」

たまった涙がこぼれ落ち、耕太はますます慌てた。泣いている女の子
は史上最強の生き物である。一介の男子中学生に太刀打ちできる
はずがなかった。

「わかったよ。わかった！　じゃあ、こうしようよ。次に肥料を買う
う時はミツキちゃんに出してもらおう。その次は僕。それでいいだろ
？」

「うん」

美津紀は幼子のように小さく頷いた。

「もう、変わってるんだから、ミツキちゃんは。お金は出さなくて
いいっていったのに……」

やっと泣き止んだ美津紀にほっとしつつも、耕太は変わっている
という表情をしていた。だがすぐに彼女の性格を思い出して納得し
た。

「そっいえば、喜びは一緒に、苦労は半分こ。ミツキちゃんのモツ
トーだったっけ」

耕太は変わらない幼馴染に思わず笑い出し、美津紀に笑った理由
をしつこく聞かれてごまかすのに苦労したのだった。

こうして、なにげない一学期最後の日が過ぎていった。

第6話 来年の夏

夏休みに入ってからからの天気はそれまでの梅雨の湿気を抜き去ろうとしているかのごとく晴天が続いた。水をやる耕太たちも、この天気ではすぐに地面が乾くのではないかと不安になるほどであった。しかし、バラはそんな心配を他所に順調に成長を続けて、青々とした葉を茂らせて、太陽の恵みを吸い取っていた。

「さて、今日はこれぐらいにしよう」

耕太は作業を打ち切り、腰を上げた。

「まだ大丈夫だよ、コウちゃん」

「明日もあるし、気長にやろう。張り切りすぎるとばてちゃうよ」
短期集中よりも長期間の粘りと忍耐が園芸の才能である。耕太はペースを考え、根を詰めないことにしていた。

しかし、それは美津紀には不満らしく、残念そうな顔をしていた。そんな彼女に耕太は苦笑を浮かべた。

「それにさ、僕も宿題しないといけないから。また、兄ちゃんに手伝ってもらって手数料取られるし、これ以上借金は増やしたくないよ」

「手数料取るの？ まあ、正輝お兄ちゃんだし、やりかねないよね。でも、相変わらずなんだ」

美津紀は耕太の話に目を丸くしたが、自分の記憶にある耕太の兄を思い浮かべてすぐく納得した。

「相変わらず鬼だよ、鬼」

耕太は頭の上に指を立てて顔をしかめた。美津紀はその姿におなかを抱えて笑った。

「じゃあ、一緒にやろ、宿題。わからないところはお互いに教えあったら早く済むし。ね、コウちゃん」

「え？ いいの、ミツキちゃん？ 助かるよ」

耕太は天の助けと喜んだ。彼女の成績は学年上位で、欠席してい

た数週間分もあつという間に取り戻していた。彼女の宿題を写せれば、万事オツケーと思うのも当然だった。しかし、優等生の彼女はしっかりとそれを見抜いていた。

「でも、写すのは禁止よ」

「げっ。ミツキちゃんのケチ」

釘を刺されて、耕太は膨れた。

「宿題は自分でしないと、ためにならないのよ。自分のためなんだから頑張りましょ」

「はい」

優等生な言葉だが、不思議と美津紀が言つと嫌味がない。

二人は道具の片づけが終わると、一旦家に帰って、宿題を持って近くの図書館の自習室に集合することにした。

近くの図書館には勉強する場所として、受験生が好んで使う静かなと自習室と自由研究などをするための子供会議室の二つがあった。ただ、子供会議室は場所も奥まっているうえに宣伝不足も手伝つてあまり知られていなかった。自習室は夏休み中、ほぼ満席であるのに、子供会議室が満席になることはまずなかった。

耕太はスコップを筆箱に、肥料を教科書に持ち替えて、図書館に急いだ。自転車を必死にこいで急いだために汗だくの上になっていた。自転車を駐輪場に放り込むと図書館に備え付けられてあるウォータークーラーの水を一気飲みして、クーラーの風に当たり、やっと生きた心地を取り戻すことができた。

「ふう、極楽極楽」

「なに、おじいさんみたいなこと言ってるのよ、コウちゃん」

既に到着していた美津紀が涼しい顔で老人くさい耕太を茶化した。美津紀は淡いブルーに白のストライプが不規則に入ったブラウスに、ライトブルーの格子柄のプリーツスカートという、少しお嬢様風のいでたちをしていた。耕太は彼女の制服がジャージ姿しか見ていなかったの、思わず見とれてしまった。

「ごめん。家を出ようとしたら、母さんと兄ちゃんが買い物、頼む

んだもん。急いでそれを済ませてきたんだ」

耕太は胸の動機は走ってきたせいと決め付けて、平静を装う事に成功した。

「それはお疲れさま。もう席は取ってあるから」

「サンキュウ、ミツキちゃん」

美津紀は笑いながら、せっかくウォータークーラーのところまで来たのだからと、ボタンを押して水を飲んだ。その姿に耕太は妙に色気を感じて、収まりかけていた動悸が再び早まった。

「まだ、顔が赤いね。回復力なさ過ぎだぞ、コウちゃん」

水を飲み終えて、耕太の顔がまだ赤いのに気がつき、美津紀はからかうように耕太の額を指で軽くつついた。

「も、もう平気だよ、うん。顔は日に焼けてるだけだって」

「見栄張らなくてもいいのよ」

「見栄なんて張ってないよ」

耕太は思わず大きな声を出して反論した。

「図書館ではお静かに」

その様子を見ていたカウンターの司書が口到人差し指を当てて注意した。

「すいません」

二人は相手のせいで怒られたと、責任の擦り付け合いをしながら子供会議室に向かった。

子供会議室はちゃんと席を置けば、五十人ほどは入れるぐらいの大きさがあった。その会議室の真ん中には六人が向かい合って座る少し大きめの机が六つほど並べられており、壁際に四つほど二人が向かい合って座れる机が置いてあった。どれも子供が楽に座れて勉強できるように高さが低めに作ってある。

既に二、三の小学生のグループが自由研究発表のために調べものをしていて、少し賑やかであった。だが、それほど耳障りなほどでもなく、二人は取っておいた二人がけの席に座った。

中学生の二人には椅子が少し低く感じたが、二人ともやや小柄なこともあり、苦になることはない。

「さて、それじゃあ、数学からやりましょう。あたし、二週間ほど学校休んでたから、おしえてね、コウちゃん」

美津紀はそう言つて、教科書とノートを取り出し、宿題の問題集を脇に置いた。

「僕が教えられるぐらいなら、期末のテスト結果で母さんに説教食らつてないよ」

耕太は中の中から中の下を行き来している自分の成績で、学年上位の美津紀に数週間のブランクという程度のハンディキャップで同等に並べると思つほど勉強を甘く見ていなかった。そして、それはすぐに正しいということを証明された。

「ここが、こうして、こうなるから、このエックスが求まるの。わかる？」

美津紀の説明に唸り声を上げた。問題集の最難関問題に挑戦中である彼は頭が沸騰しそうだった。

「あー、ここまでは順調に来たのに。やっぱり、僕の頭だな」

最初は美津紀に、休んでいた時にやっていたところを耕太が教えていた。しかし、美津紀は耕太の説明ですぐに理解して、逆に彼に教えていた。

「そんなことないって。コウちゃんの教え方、とってもわかりやすかったもの。コウちゃんはやればできるって」

美津紀は耕太の園芸に関する知識の豊富さと記憶力やその応用力、肥料や薬品の濃度の計算などを簡単にやっているの、やればできると確信していた。実際、耕太の教え方は要領を得て、上手かったし、教えることで理解が深まったのか、美津紀のヒントだけで、難しい問題も間違わずに解いていつていた。

もつとも、教師が嫌がらせで入れたとは思えない難関進学高校の入試験問題には少なくてこずっていたが。

「あーあ、来年は受験か。来年の今頃は、向ここの自習室で勉強の

虫になつてなきやいけないんだろうな」

耕太は問題を解くのを一時中断して、背もたれに身体を預けた。そして、閲覧所をはさんで反対側の、ここから見えない静かな自習室の方を向いた。

「そう、だね」

美津紀は元氣なく耕太の言葉に頷いた。

「ミツキちゃんは心配ないよ。それだけできるんだもん。どの高校だつて絶対合格するよ」

その元氣のなさに耕太は少し心配と驚きを感じながらも明るく笑つた。

「うん……」

「やっぱり敬信学院に行くの？」

敬信学院はこのあたりでは有名な進学校である。七年前までは敬信女学院といつて、女子高だったが、少子化で共学になり、校名が変更された。清楚で人気のある制服と進学率のよさが競争率を上げており、共学になつても変わらず難関の進学校で女子に人気のある学校であつた。

「あたしは、いけるんならどこでもいい」

美津紀は何かをかみ締めるように静かに言つた。それが耕太には美津紀の受験に対する不安のように映つた。

「だよな。でも、行けるんなら、僕も敬信学院、行きたいな」

「コウちゃんか？」

意外な台詞に美津紀は耕太の顔を見た。意外なほど真剣な彼の顔に美津紀は思わず、胸が高鳴つた。

「今、僕じゃあ、無理とか、スケベとか思つたんだろ？」

敬信学院は元女子高ということもあり、男子学生のための設備や、男子への進学指導の経験が浅いところが指摘されていた。そういうことから、同じ難度の高い学校なら別の学校を選んだ方がいいといわれており、好んで受験しようという男子生徒が少なかった。そのため、共学になつた今でも、ほとんど女子高という男女比を誇ってい

た。そのおかげで、『ハーレム学校』などと揶揄もされていた。

ちなみに、そのあだ名に釣られて受験する男も多かったが、容易なスケベ心では合格するのは難しい学校でもあった。いつしか、敬信学院の男子生徒といえど、『よつぽど頭のいい自信家か、よつぽどのスケベ』といわれるようになっていた。

耕太はそれを気にしていたのである。

「うっん。そんなことない」

美津紀は思いつきり首を振った。

「まあ、いいよ。スケベはともかく、今の僕の成績じゃあ、無理だからね。でも、がんばればいけるかもしれない」

「うん、コウちゃんならいけるよ。絶対」

真剣な耕太に美津紀は力強く頷いた。美津紀は耕太には本当にそれだけの力があると思っていた。だから、気休めではなく真剣に頷いた。

「僕が行けるんなら、ミツキちゃんもいけるよ。絶対」

耕太はその真剣な頷きに少し驚いたが、耕太も同じように真剣に頷いた。

「うん、そうだね」

「一緒にいこうね」

耕太は話が一段落すると、思い出したように言い訳を始めた。

「あ。これだけは言っておくけど、どこぞのバカ兄ちゃんみたいに『ハーレムと聞いていかないわけには行かないだろう』なんて理由じゃないからね。本当だよ。ちゃんとした目的があるんだから」

「わかってるって。コウちゃんがどんな男の子かは、よく知ってるから。正輝お兄ちゃんとは違うことくらいわかってるって」

美津紀は必死で言い訳する耕太をおかしそうに笑った。

そうしていると、向こうのテーブルで自由研究をしていた小学生の一人が二人のところへやってきた。

「おねえちゃんたち、ラブラブやなあ。でも、イチャイチャするんは外でやってんか。そないにイチャイチャされたら暑くて冷房が利

かんようになるわ」

その小学生は関西出身なのだろう、おっさんのような口調で二人を注意した。二人は気がつかないうちに、おしゃべりしてもいい会議室でも少しうるさいぐらい大きな声で話していた。

小学生たちに笑われながら、二人は小さくなつて小学生たちに謝り、おとなしく勉強を再開する事にした。

「高校、か……」

美津紀は誰にも聞こえないように心の中で呟いた。しかし、それは彼女にとっては、考えられない未来の話であった。

第7話 ジューズの乾杯

夏の盛りはすぐに地面が乾燥する。植物が十分に水分を吸い上げる前に乾燥してしまつては意味がないので、水やりは涼しい朝と涼しくなる夕方の二回することにした。

バラに限らず、植物は水が不足すると生き残るために葉っぱを落として水分の節約に努める。葉っぱが多いと水分を外へ放出してしまつからである。しかし、それは植物にとって最後の手段であつた。葉っぱを落とすことは葉っぱで行われる光合成を捨てることであるため、水は節約できても栄養は不足する。

なので、水が不足することはなんとしても避けなければならないことであつた。しかし、水のやりすぎてもいけない。水が多いと植物は根をしつかり張らなくなり、脆弱になつてしまふ。最悪の場合、根が腐つてしまふ。

程よい水を与えることは植物を育てる基本であつた。

そして、肥料にも同じ事がいえた。肥料食いと異名を持つバラも肥料が多ければ健全には成長しない。肥料が多すぎると花の色が悪くなることもあり、その匙加減は熟練の技が必要となり、職人技ともいえた。

耕太は園芸が好きとはいえ、経験では中学二年の青二才である。

しかも、その中でも経験の浅いバラである。失敗も数多く、予想以上に悪戦苦闘していた。

水、肥料、それ以外にも苦戦を強いる存在があつた。

「うーん、虫がついてるな」

園芸の専門家で、耕太が師匠と仰ぐ初老の男が渋い顔をした。

「虫……」

バラの大敵は病気と害虫。大抵の植物でもそうだが、バラは品種改良を重ねた結果、美しい花を咲かす事はできたが、その二つへの抵抗力をかなり失つてしまつていた。

なので、耕太は病気も害虫も細心の注意を払ってきたが、完璧ではなかった。病気にもさせかけたし、害虫も一度、アブラムシを大量発生させて危ういことがあった。

「まだ、少ないようだから見つけて潰したほうがいいな。薬はできれば使わない方がいいからな」

初老の庭師はゾウムシを一匹捕まえて指先で潰した。耕太の後ろで美津紀が短い悲鳴を上げた。

「手伝ってやりたいが、仕事があつてな」

庭師は少し苦笑しながら腰を上げ、耕太の頭をなでるように手を置いた。

「そんなことないです。見てくれただけで感謝しています、神崎社長。あとは僕たちだけでやりますから」

「そうか。すまん。美津紀ちゃん……だったかな？　しっかりな」

庭師はすまなそうに耕太と美津紀に謝るとバラ園を後にした。その後姿を見ながら美津紀は硬直していた。

「ミツキちゃん……」

「何も言わないで！　わかってるから。でも、ここで引き下がったら、女がすたる！　女は度胸よ！」

心配そうな耕太に美津紀は気合を入れて、虫退治に取り掛かった。既に耕太と二人、図鑑で害虫の種類は調べて憶えている。目に見えないハダニなどは形も知らないが、その退治法も知っている。あと美津紀に必要なのは勇気だけだった。

「おりゃあ！」「とりゃあ！」「ほにゃあ！」

その日、美津紀が勇気を振り絞る際に出す謎の掛け声がバラ園に響き渡ることになった。その奇妙さは、運動場で練習していた運動部部員が気味悪がって覗きに來たほどである。そのたびに耕太が事情を説明する羽目になっていた。

二人がかりで鬼神のごとく害虫駆除に奔走した。もともと、発見が早かったこともあり、虫の数はさほどではなく、二日目にはほぼ駆除を完了してしまった。あとは順次見回りを強化しながらの掃討

作戦に移行してよいと師匠の庭師から合格をもらうことができた。

「はい、ミツキちゃん」

その日の作業が終わった後に耕太は良く冷えた缶ジュースを美津紀に手渡した。

「どうしたの、これ？」

「神崎社長からのおごり。がんばったごほうびだつて」

師匠の庭師はだいぶ前に車で帰っていた。多分、見送りにいった耕太がジュース代を貰ったのだらう。美津紀はジュースを受け取ったものの、飲むのをためらった。

「どうしたの？ ミツキちゃん。オレンジジュース嫌いだった？」

ジュースの缶を持ちながら戸惑う美津紀に耕太は首をひねった。

「あたしたち、自分たちがしたくてやっているんでしょ？ 神崎社長は仕事じゃないのに、わざわざ見に来てくれているんでしょ？ それなのにごほうびをもらうつて、いいのかな？」

美津紀は指先に少し痛いような冷たさを感じながらジュースを見つめた。表面には結露した水が「おいしいよ」といわんばかりにっている。

「真面目だなー、ミツキちゃんは」

耕太は美津紀の戸惑いを知って苦笑を浮かべた。

「ごめんなさい」

「ちがうよ。優等生だからつまらないとか思ってたんじゃないよ」

耕太は首を振って、美津紀の「ごめんなさい」を否定した。

「神崎社長、褒めてたよ。ミツキちゃん、絶対逃げ出すと思ってたんだつて。失礼だろ？ ミツキちゃんがそんな女の子じゃないことくらい知ってるのに」

美津紀は黙って缶ジュースを見つめながら耕太の話を聞いた。

「いまどきの若い女の子にしては根性が据わってるつて。当たり前じゃないか、ミツキちゃんだよ？ 僕の最強コンビの相棒が根性据わっていないわけがないじゃない、つて言っておいたよ」

耕太は屈託のない笑顔で美津紀にブイサインした。

「たぶん、神崎社長、ミツキちゃんが途中で逃げ出さなかったことがうれしかったんだと思うよ。だから、ごほうびなんだ」

「コウちゃん」

「それにさ。夏休みも遊びまわらずに毎日毎日水やりとか、バラの世話をしているのを見ていた神様がくれた、ささやかなごほうびなんだよ。真面目にやっている人間は神様がきつと見ていてくれて、なにかごほうびをくれるんだよ、きつと。だから、ありがたく貰っておこう」

「神様……ごほうび……まじめに……」

美津紀は罪のない耕太の台詞が胸に刺さった。

「じゃあ、あたしは？」

美津紀は思わず声に出した。しまったと思ったが、耕太には脈絡がなさ過ぎて怪訝な顔をされただけであった。でも、すぐに笑顔になった。

「うん。ミツキちゃんの頑張りへのごほうびだよ。乾杯しよう」

耕太はジュースの蓋を開けると中の空気が鋭い音を立てて外へともれた。美津紀も黙ってそれに倣った。

「虫退治完了祝いと、きれいなバラが咲くように祈願して」

「乾杯」

二人は缶をお互いに軽く当てて、ジュースを飲んだ。

渴いた喉と疲れた身体には気持ちいい酸味のある甘いジュースだったが、美津紀はほんの少し苦さを感じた。舌のせいなのか、もっと別のもののせいなのかはわからない。

「美味しいね、ミツキちゃん」

耕太がそんな美津紀の悩みを吹き飛ばすように笑顔を見せた。美津紀はその笑顔をしばらく見つめていた。

「（あたしのごほうびは、あたしが真面目にやっていたごほうびは、きつとコウちゃんに会わせてくれたことなんだね）」

美津紀はなんだか知らないが、うれしくなった。そして、ジュースを飲み干そうとしている耕太を止めた。

「ねえ、もう一回。もう一回、乾杯しましょ」

さっきまでの沈んでいたのが嘘のように晴れ晴れとした表情でそういった。

「うん。いいけど、なにに？」

耕太は申し訳程度にしか残っていないジュースの缶を軽く振った。
「ないしょ」

耕太と出会った事に乾杯など言えるはずもないので美津紀は悪戯っぽく笑って誤魔化した。

「内緒なんてズルイよ」

「いいの。ほら！ ちょっと貸して」

膨れる耕太の持っていたジュースの缶を強引に自分のほうに引き寄せると、まだ大量に残っている自分のジュースを耕太の缶に注ぎ込んだ。

「これでよし。それじゃあ、かんぱーい！」

「え？ あ！ かんぱい」

缶を当ててあまりきれいでない音を立てると美津紀は一気にジュースを飲んだ。今度はどこまでも甘く酸っぱい味がした。

耕太は動揺しながらジュースを慌てて飲み干した。念入りに最後の一滴まで。

「よっぽど喉が渴いてたんだね、コウちゃん」

「う、うん。そうなんだ。あはははは」

耕太は笑って誤魔化した。まさか、美津紀と間接キスだから最後の一滴までもつたないと思ったなどいえるはずがない。

その日は始終、二人とも変な間合いで笑いあい、家路に着いた。

第8話 お見舞い

気象庁が発表する日の出時間とほぼ同じ時間にセットされた目覚ましが数回ベルを鳴らして、止められた。

耕太は二度寝することなく起き上がると、大きく伸びをして朝の支度に取り掛かった。

着替えが終わって、今日持つていくものを再チェックした。

「えーと、ミツキちゃんに借りてた漫画と……あ、そうだ。見たいつていつてた、花言葉図鑑を持つていつてあげよ」

本棚からポケットサイズの本を取り出し、デイバッグに詰め込むとそれを持つて居間のある一階に降りた。

「おはよう。あいかわらず、早いな」

耕太が朝食をとるために台所に入ると、テーブルには大学生ぐらいの若い男が少し疲れた顔で座っていた。

「おはよう、兄ちゃん。また徹夜？」

耕太はあきれたように少し年の離れた兄、正輝を見た。しかし、兄にかまつてのんびりしている暇はない。デイバッグを置いて、ご飯を茶碗によそい、インスタントの味噌汁を作った。

「うん、まあな。朝一番で大学にレポート持つていけないといけなからな」

「また友達に売るつもり？」

「勉強もできてお金ももらえる。一石二鳥のアルバイトだよ」

正輝は楽しそうに笑った。勉強の苦手な耕太には考えられないアルバイトである。正輝も別に勉強が好きなのわけではないが、どういうわけか小学校一年から学年トップを走りつづけ、今では名前を聞けば誰もが知っている有名国立大学の学生をしている。

「頭のできが違う」

耕太は正輝と比較されるたびにそう言って笑っていたが、かなりコンプレックスであった。もっとも、学校の先生は、正輝が残した

伝説の数々のおかげで、「お前のお兄さんは」「という言い方は絶対にしない。逆に「お兄さんに似てなくてよかった」と心底、言われるぐらいであった。

「しかし、毎日ご苦労だな」

正輝は目覚ましに濃く入れた紅茶をストレートで飲みながら耕太のバッグを覗き込んだ。中には軍手やタオルなど園芸グッズが入っていた。

「地面が乾くとだめになるからね。朝の早いうちに水をやって蒸発する前に吸い上げてもらわないと」

「お？ 少女漫画が入ってる」

正輝はビニールに包まれたマンガ本を見つけて楽しそうな声をあげた。

「ミツキちゃんに借りたんだよ。この間、家に行った時に読み出して、続きが気になるって言ったら貸してくれたんだ」

「ふーん。確か、孤児の女の子が大物女流小説家の養子になって子役をする話だったな。いい話だった」

正輝は漫画のタイトルを見て目を細めた。

「読んだことあるの？」

「まあな。少女漫画はちよつとうるさいんだぞ」

「……兄ちゃんって、いつ勉強してるの？」

「ひまな時」

正輝がにやりと笑って耕太の問いに答えると耕太はため息をついた。

「本当に出来が違うや」

耕太は失意を感じながらも、食べた食器を洗い桶に沈めるとデイバッグを持って立ち上がった。

「それじゃあ、いつてきます」

耕太が出て行こうとした瞬間、電話が鳴った。耕太はこんな朝早く誰だろうと思ったが、電話は正輝に任せて出発することにした。しかし、正輝は電話を取りながら手をあげてジェッシャーで耕太の

出発を止めた。

「はい、遠野です。　ああ、おひさしぶりです。ご無沙汰しておりますが、お変わりありませんか？　ええ、はい。僕の方はあ
いかわらず、のんびりやってます。　ええ、はい。ぜひ、そのうち。それでは代わります」

正輝は通話口を押さえて、耕太の方を見た。

「美津紀ちゃんのお母さんからだ」

耕太は台所に戻り、受話器を受け取った。なにやら受け答えをし、数分後、少し落胆した表情で小さくため息をついて受話器を置いた。
「美津紀ちゃん、今日はお休みか」

「聞いてたの？」

正輝の声に耕太は驚いたように振り返った。

「受け答えの内容を聞いてたら想像はつくし、なにより最後のしよ
げたため息だけでもだいたいわかるよ」

「夏風邪をひいたんだって。ミツキちゃんは平気だって、行きたがつてたみたいなんだけど無理はさせられないからって」

耕太は、美津紀が長期欠席から復学してからも週に何度か通院していることは知っていた。しかし、予定されていた通院以外で休むのはこれが初めてであった。耕太にとって、美津紀は絶対に休まない健康な女の子という昔からの印象が強かったし、一緒に作業するようになってからも病気だったのが嘘のような元氣な振る舞いをしていたので、今更ながらにシヨックを受けていた。

「夏風邪はこじらせるとつらいからな。賢明な判断だ」

「わかってるよ！　そんなこと」

耕太は正輝の正論にいらついて声を荒げた。

「まあ、帰りにお見舞いにでもいつてあげれば、美津紀ちゃん、喜ぶかもな」

正輝はわかりやすいかわいい弟の反応に微笑みながら、ヒントを教えて自分の部屋に戻っていった。

「お見舞い、か」

耕太は少し考えていたが、予定していた出発時間を大分と過ぎていることを思い出して慌てて家を出た。

今日は一人で、しかも他にもやらないといけないことが急遽できたのであるから、ますますのんびりしている暇はない。

美津紀の家はこの辺では新しい住宅街で、耕太たちの住む昔からある集落などとは違い、マスの目状に道路が走り整然としていた。

午前中の作業を終わり、日差しが厳しい昼下がりに陽炎とともに耕太は自転車を走らせた。

やはり一人での作業では思うほどはかどらず時間がかかってしまった。午前中にお見舞いに行く計画は早々と頓挫して、この時間となつたのであつた。

以前ならば一人が当たり前であつて、誰かに手伝ってもらえる日がボーナスステージだったのを思うと、慣れは怖いと耕太はしみじみと感じていた。

耕太は母親に持たされたお見舞いのプリンが乱暴な運転でダメにならないように気をつけながら美津紀の家へと急いだ。

「やつとついた！」

家に帰ってシャワーを浴びて着替えてきたが、それは無意味といわんばかりに汗が噴き出して、シャツは汗でべったりと身体に張り付いていた。

耕太は少しためらいながらも美津紀の家の呼び鈴を押した。昔、何度も押した呼び鈴なのにやけに緊張している自分が不思議だった。

「はい。どちらさまで？ あら、耕太君」

出てきたのは予想通り、美津紀の母親であつた。耕太の小さい時の記憶とあまり変わらない姿になぜだか彼は少し安心した。

「あの、ミツキちゃんの具合はどうですか？ あ、これ、母がつまらないものですが。食べてください」

耕太は気持ちが焦るのをなんとか抑えながら、プリンの入った箱を差し出した。

「あらあら、気を使わせちゃったわね。ごめんなさいね　美津紀の具合はもういいのよ。多分、明日はちよつと様子を見るのに休ませるつもりだけど、明後日には花壇にいけると思うわ」

美津紀の母親はプリンの箱を受け取り、優しく耕太に応えた。

「あの、ミツキちゃんは？」

「ごめんなさいね。耕太君に風邪をうつしたらいけないし、今、寝ちゃったところなの。本当にごめんなさいね」

直接会うつもりだった耕太は見るからに落ち込んでしまい、美津紀の母親が本当に申し訳なさそうに謝った。

「いえ、風邪引いてるんだし、長引かせるといけないし、またすぐに会えますから。あ、そうだ。これ。借りてた本と、ミツキちゃんが見たがっていた図鑑です。起きたら渡しておいてください。お願いします」

耕太は「無理を言うわけにはいかない。自分は大人なのだ」と自分に言い聞かせ、優等生の反応を示した。

「ありがとう。起きたら必ず渡しておくわ。耕太君が来たこともちゃんと伝えておくわ」

美津紀の母親は優しく微笑み、耕太から本を受け取った。その微笑が少し寂しそうな感じがして耕太は不思議に思い、それをそのまま言葉にした。

「おばさん、どうかしたんですか？」

「え？　なにが？」

美津紀の母親は驚いた表情を一瞬見せたが、すぐに元の優しい笑顔に戻った。

「いえ、なんとなく。ごめんなさい、変なこと訊いて」

耕太は失礼なことを訊いてしまったと身を縮めて反省した。

「いいのよ。　耕太君」

「はい？」

美津紀の母親の声がやけに神妙なので耕太は思わず身構えた。

「美津紀と、これから仲良くしてやってね」

しかし、彼女の口から出てきたありきたりな言葉に耕太は拍子抜けした顔をした。しかし、すぐに笑顔になった。それは小さい時から美津紀の母親によく言われた台詞であつた。そして、その返事も決まっている。

「はい、もちろんです。ミツキちゃんは、僕の最強の相棒ですから」「ありがとう、耕太君。あなたが、美津紀の幼なじみで本当に良かったわ」

美津紀の母親はいきなり耕太を抱きしめた。突然の事に耕太はびっくりして、されるがままに抱きしめられていた。

耕太ははつと我に帰り抱きしめている美津紀の母親に呼びかけた。

「あ、あの、おばさん？」

「あ、ごめんなさいね。こんなおばさんに抱きつかれて、イヤだったわね」

美津紀の母親は耕太からそつと身体を離し、優しく微笑を浮かべた。

「いえ、そんなことは……」

当たり前の話だが美津紀の母親は美津紀によく似ていて、耕太の母親よりもずっと若く、しかもキレイだった。正直なところ、耕太の心臓はかなりドキドキして、ともに顔を見ることが出来なかった。そのため美津紀の母親の目じりに光るものがあつたことには気が付かなかつた。

「あの、僕、夕方の水遣りがあるので帰ります。ミツキちゃんによろしく言っておいてください。風邪が治るまでは無理しないでつて。それじゃあ、お邪魔しました」

耕太は妙な空気に居心地が悪くなり、別れの挨拶を一息でいい終わると自転車に飛び乗り、一気に駆け出していった。

第9話 たった一つの覚悟

夕方の水遣りをして、道具を片付け終えた。片付けた後に、耕太は今日一日の作業進捗を改めて見てため息をついた。

作業は予定していた半分ほどしか進んでいなかった。一人だというのもあったが、どちらかというと作業に気が入らないでいたのが原因であった。

「こういう日もあるよな」

耕太は自分で自分を納得させて、家路についた。

空は西から東へ、朱色から藍色へのグラデーションが塗りつぶしていた。焼けたアスファルトが放つ熱でまだ暑気は消えないが、公園の脇を通る時に感じた風は汗ばんだ身体をほっとさせてくれた。

耕太は妙におなかが空いてきて、まっすぐ帰らずにスーパーに寄り道することにした。帰ればすぐに夕食だろうが、育ち盛りの彼の胃袋には少しぐらいの買い食いなどは誤差の範囲である。これまでも何度か、耕太は帰りにスーパーの惣菜売り場の安売りコロッケを買い食いしていた。

耕太はスーパーの自転車置き場に自転車を置き、顔見知りのパートのおばちゃんにこっそりと割引シールを張ってもらった。レジを済ませてスーパーを出ると駐輪場に向かう途中の、買い物客から死角になるところでコロッケの包みを開けた。

「近所のおばちゃんにみつかるぞ、お母さんに告げ口されちゃうかなー」

耕太は噂が好きで詮索好きの素敵な主婦の方々を思い浮かべながらコロッケをかじった。

油の強い、お世辞にも上品な味ではなかったが、食べ盛りの耕太には満足いくボリュームと味であった。

スーパーの周辺は日中の暑いときの買い物を控えていたのと、閉店間際の値引きを狙った主婦たちでにぎわって、あちこちで井戸端

会議が開催されていた。

「ねえ、きいた？ あの話」

耕太がいるのを気が付かずに、彼のいるすぐ近くで何人かの主婦が集まって立ち話を始めた。耕太はそんなことは気に留めずにコロッケを食べることに集中した。

「ええ、聞いたわよ。かわいそうね」

主婦の誰かが応じたのをきっかけに井戸端会議はスタートした。

耕太は「よく毎日話すことがある」とコロッケをほおばりながら感心した。

「なに？ 何の話？」

「友坂さん家のお嬢ちゃんの話よ」

耕太の体がぴくりとはねた。友坂という姓は珍しくないが、多くもない。

「あの娘さんがどうかしたの？ 元気がよくって、勉強ができて、評判の子だけど？」

耕太は美津紀のことだと確信して耳をそばだてた。

「それがね、どうも病気になったらしいのよ」

「（病気？ 夏風邪のこと？ 前の入院のこと？ だけど、そんなこと話題にするのか？）」

「ほんとなの？ この間、元気そうに歩いてたわよ」

「（そうだよ。毎日、バラ園の世話してるんだ）」

「本当なのよ、それが。偶然、その話をしているところを聞いちゃったのよ。もう、びっくりしたのなんの。もう永くないんですって、この夏休み、もつかどうかっていう話よ」

「（うそだ！）」

耕太は手に持っていたコロッケを思わず強く握った。具がはみ出て無残な形になったが、今はそんなことはどうでもよかった。

しかし、他の主婦から出てくる情報はその噂が真実であることを示すものばかりであった。通っている病院、主治医の先生の専門、はたまた飲んでいる薬の種類まで知っていた。

「いい娘だったのに、かわいそうね」

「ほんと。でも、健康が一番よね」。そう言えば、カルビさんの『おもこつてりテレビ』見た？」

「見た見た！ 紅茶きのこが」

あとの会話は耕太の耳には入ってこなかった。どれぐらいその場所にといただらうか、日は完全に沈んですっかりあたりは暗くなっていた。いつの間にか座り込んでいた耕太はのろろと立ち上がり、ふらつきながら家に帰った。

家に帰ると遅い時間までうろついていたことを母親が叱ったが、心ここに在らずの耕太には又力に向かって五寸釘を打っているようなものであった。手ごたえのない説教に母親の伝家の宝刀『晩御飯抜き』が炸裂したが、耕太は何の反応も示さずに自分の部屋へと引きこもった。

耕太はベッドに腰掛けて、目は開けていたが、何も見ていなかった。おなか为空いたような気がするが、どうでも良かった。とにかく、今は何もしたくない。何も考えなくなかった。

耕太の部屋の扉が軽い音を響かせた。

「耕太。入るぞ」

許可を貰う前にドアノブを回して、耕太の兄、正輝が入ってきた。手にはラップをかけたおにぎりと麦茶のボトルが乗ったお盆を持っていた。

「とりあえず、風呂に入ってこいよ。汗まみれだろ？」

正輝はお盆を耕太の学習机の上に置くと机の椅子に腰掛けた。

「おふろ？」

耕太は不思議そうに正輝を見た。何でお風呂なんだろう？ 耕太は正輝の真意がわからなかった。

「さっぱりするぞ」

正輝にそういわれると、なんだかそうなのかもしれないと耕太はのろろと立ち上がり、風呂場へと向かった。

三十分ほどして、耕太がお風呂から上がってくると正輝は黙って食事を載せた盆を差し出した。耕太がお風呂に入っている間におにぎり以外のおかずが追加されていた。おそらく正輝が作ったのだろう。彼が得意な手間ひまかけない男の小手先料理であった。

耕太は何も言わずにそれを夢中になって食べた。まるで何日も食事をしていないかのような食べっぷりだった。

「父さんと母さんはカラオケに行った。多分、夜中まで帰ってこない」

正輝は麦茶をコップに注いで耕太に差し出した。耕太はそれを受け取り、一気に飲み干した。

「兄ちゃん……」

「なんだ？ お金の相談以外なら乗ってやるぞ」

正輝は自分のコップにお茶を注ぎ、空になっている耕太のコップにも注いだ。

「にいちちゃん……」

耕太は止まっていた時間が動き出したかのように目からぼろぼろと涙を流し、今まで見せたこともないような大声で泣き始め、正輝にしがみついた。

正輝はそれを受け止め、ただ黙って泣かせていた。

どれだけ泣いたか耕太はわからなかったが、あとで正輝に聞いたところ、四十三分十二秒だったらしい。知らない人が聞けば適当とつかかもしれないが、こういうときの数字は意外とちゃんと測っていたりするのが正輝の正輝たるゆえンである。

落ち着きを取り戻した耕太は自分が聞いた噂話を正輝に全て伝えた。

「単なる噂話とは思えないというわけか」

正輝の言葉に耕太は頷いた。

「まあ、お前の話が本当なら、条件がそろいすぎていて間違いないかもしれないな」

耕太は正輝の分析を聞いて歯噛みした。それは自分のものと同じ

であつた。違う結果を言つて欲しかつたが、それがありえないだろうこともわかつていた。

「兄ちゃん、どうしよう？　僕、ミツキちゃんに言つた方がいいのかな？」

耕太はぼそりと呟いた。噂が本当なら美津紀には力いっぱい残りの時間を生きて欲しい。耕太はそう思い始めていた。

しかし、その呟きを聞いて正輝の顔が陰しくなった。

「一つ訊くが、お前が美津紀ちゃんに『耕太の命は一ヶ月です』って言われたら、どう思う？」

「え？　冗談だと思ふに決まつてるよ」

「それが冗談じゃないといわれたら？」

不思議そうな表情の耕太に正輝は重ねて訊いた。

「そんな事言われたら、どうしたらいいかわからないよ。ショックで立ち直れないかもしれない」

耕太は困つたように正輝の質問に答えた。

「そしたら、美津紀ちゃんも同じように思ふ可能性があるってことだな」

「あ……」

正輝の言葉に耕太はやつと質問の真意に気がついて声を失つた。

しかし、それでも心にしこりが残つた。

「で、でも……」

「お前の言いたい事はわかる。何も知らずに死んでいくのはかわいそう。残りの時間を有効に使つて欲しい。そういうことだろ？」

「うん……」

言いたい事を先に言われ、耕太は素直に頷いた。

「だけど、それはお前の勝手な優しさだろ？　かわいそう。なにかして欲しい。どっちもお前の感情しかないじゃないか」

耕太は正輝の言葉に氷水を浴びせられたように身を震わせた。まさに正輝の言うとおりであると思つた。耕太の優しさは自己満足の優しさでしかない。

「暗い顔するな。中学二年のお前にそこまで悟れって言うのが酷な話だ。だけど、勝手な優しさを押し付けられるほうはもつと酷だぞ。その話をして、お前は美津紀ちゃんを残りの人生を精一杯生きるように導けるか？」

耕太は俯いてゆっくりと首を横に振った。その質問に首を縦に振れるのは、よほどの自信過剰の大馬鹿か、神様ぐらいだろう。

「そういうことだ。美津紀ちゃんの両親が彼女に黙っているのなら、お前も黙っている」

人の心に深く立ち入る事だけが親しさではない。ただ単に立ち入るだけなら、それは親しいのではなく、相手の心を蹂躪しているだけに他ならない。立ち入るのなら、それなりの覚悟を決めなければならぬ。その覚悟ができるから親しいのである。

「だ、だけど、したら僕はどうしたらいいんだよ」

耕太は俯いたまま心のままに叫んだ。正輝の言う事はわかる。しかし、耕太にはお説教よりどうすればいいかを聞きたかった。

「あんまり頼るなよ。俺だって、そんなに人生経験豊富じゃないんだからさ」

正輝は曖昧な苦笑を浮かべて、椅子に身体を預けて少し視線を上げた。それが正輝の考え事をするときの癖である事を知っている耕太は黙って彼の言葉を待った。

正輝はしばらく考えた後に答えを見つけたのか、視線を耕太に戻した。

「今まで通りでいいんじゃないか？」

「今まで通り？」

正輝が考え込んだ末の答えにしてはあまりにもあっさりとした答えに耕太はオウム返しに聞き返した。

「そう。今まで通り。一緒にバラ園の世話をして、一緒に勉強して、一緒に遊ぶ。それでいいんじゃないか？」

正輝も少し不安な表情をしながらも耕太に言った。

「だけど」

「美津紀ちゃん。お前と一緒にいて退屈そうにしてるか？」

文句を言いかけた耕太の言葉を遮るようにタイミングよく正輝は訊いた。

「え？　なんで、そんなこと訊くんだよ」

「いいから答えろよ」

「うーん、そんな風には見えないけど……バラ園の世話も自分からやりたいって言ったことだし」

訳がわからなくても、正輝の質問に素直に答えた。

「そうだろうな。好きじゃなけりゃ、やってられないよ」

正輝は耕太の解答で自信を持って頷いた。

「え？　好きって？」

耕太は不意に胸が高鳴るのを感じて顔が赤くなった。

「バラ園の世話がな。学校でもないのに朝早く起きて、土いじって疲れて。好きじゃないとやれないだろ？」

正輝は耕太の反応が予想通りだったことに意地悪い笑顔を浮かべて彼の想像を否定した。

「あ、うん。そ、そうだね」

耕太は恥ずかしさと失意で俯きながら元氣なく呟いた。さすがに正輝もそれを見て良心が痛み、耕太の肩をぽんと叩いた。

「落ち込むなよ。美津紀ちゃんが園芸マニアって聞いたことはないけど、どうだった？」

「え？　えーと、今までまったく園芸なんてやった事ないって言うてた」

「女の子はお花は好きだけど、それを育てるのが好きな人はかなり減る。よっぽど花が好きじゃないとな。てことは美津紀ちゃんはお前といて楽しいから世話も続けているんだろ。それは自信持てよ」

「う、うん」

正輝に気がないわけじゃないとフォローを入れられ、現金にも気分が復活する単純さには嫌気が差したが、それよりも正輝の言葉の方がうれしかった。

正輝はそのわかりやすい様子に我が弟ながらシンプルなやつだと、半ば呆れて、半ばうらやましく苦笑を浮かべた。

「案外、自分のことを知ってるのかもな。美津紀ちゃん」

正輝はその可能性が高いと思ったが、それは口にしない事にした。たとえ、そうだとしても何も変わらない。変わるとしても悪い方向に向くような気がした。

一方、美津紀が自分に気があるかもしれないという言葉に喜んでいた耕太だが、現実の問題を思い出し、顔を再び暗くした。

「ねえ……兄ちゃん。僕、自信ないよ。ミツキちゃんの楽しい思い出になれるなんて。特別なことなんてできないし……。どうすればいいと思う？」

「お前なあ。他人にばかり頼るなよ」

正輝はあきれて突き放すように言った。

「だけど」

正輝に突き放された耕太は再び涙を目に溜め始めた。

「わかった。わかったから、泣くな」

さすがに何度も泣かれるのは気が滅入るのだろう。正輝は必死に耕太の涙があふれるのを止めた。

「う、うん」

正輝の言葉に落ち着いた耕太が幼子のように頷いた。正輝は一つため息をついて少し居住まいを正した。

「お前、一期一会って言葉、知ってるだろ？」

「いちごいちえ？」

オウム返しの声に正輝は少し頭を抱えた。

「お前、もうちょっと国語の勉強しておけよ。一期一会って言うのはだな。俺とお前がここで今、会っている。明日も会えると思うか？」

「そりゃ、会えるに決まってるじゃないか。同じ家に住んでて、隣の部屋なんだからさ」

耕太はいきなりふざけた事を言い出す正輝に不審な視線を向けた。

「それじゃあ、俺が明日、交通事故で死んでもか？」

「え？」

死と言う言葉に耕太は過剰に反応して身体を緊張させた。

「たえ話だ。不安そうな顔になるな」

正輝は苦笑して、耕太を安心させると言葉を続けた。

「だけど、そういうことだ。『朝には紅顔ありて夕べには白骨となる身』って、昔の偉いお坊さんが言っている通り、人間、次の一瞬に何が起こるかはわからない。今日会えた人と明日も会える保証なんてどこにもない。だから、出会った人には、どんなに親しい人でも丁寧にもてなそう。それが今生の別れ 最後の別れになっても後悔しないように。という茶道の教えの一つだ」

「へえー。兄ちゃん、物知りなんだね」

「お前、今までどういう目で俺を見てたんだ？」

「こっぴどい目」

耕太は珍獣や変わったものを見るような目をして見せた。

「こいつめ」

正輝は耕太の頭を軽く叩いた。

「ひどいよ、兄ちゃん。ただでさえ悪い頭がますます悪くなったじゃないか」

耕太は叩かれた頭を押さえながら軽口で文句を言った。

「そうか。それならもっと勉強しろ。すぐに元に戻る」

「むー」

「だが、その悪くなった頭でも充分わかっただろ？ つまり、美津紀ちゃんと会うのは毎日が本当の意味で一期一会ってわけだ。わかるな？」

正輝は真剣な顔つきに戻って諭すように言った。耕太はふざけて誤魔化したかったが、それを許されないことを改めて思い知らされしよんぼりとした。

「うん……。だけど、それなら、なおさら、僕、どうしたらいいかわかんないよ」

「甘えるな、耕太」

正輝は驚くほど厳しく、静かな声で叱った。その声に耕太はびくと震えた。

「美津紀ちゃんのことを思うんなら自分でどうするのがいいか考える。間違いを怖がって何もしたくないならそれでもいい。だけど、何かするのも何もしないのも自分で考えて、自分で責任を持ってやれ。これはお前と美津紀ちゃんの間の問題だ。他人の俺が口を挟めるのはここまでだ」

「兄ちゃん……」

正輝の言わんとすることはわかった。しかし、耕太は不安で仕方なく、すぐるような目で頼りになる兄を見つめた。

「心配するな、多分、お前ならうまくやれる。協力はしてやるから、思ったようにやってみろ」

正輝はすぐるような視線を正面から受け止め、自信に満ちた笑顔を浮かべた。耕太はその笑顔で信賴する兄がこれほど自信を持って自分のことを信じているのならできるかもしれないと、少しだけ不安が和らいだ気分になった。

「うん。僕、やってみるよ」

耕太の言葉に正輝は黙って頷き、頭を軽くなでてやってから部屋を出て行った。

部屋を出た正輝は口の端を思いつきり噛んだ。血がにじんで口の中に鉄くさい血の味が広がったが、それよりも苦いものが心の中に広がっていた。

「とんだ偽善者だな、俺も。逃げてばかりだ」

誰にも聞かれないように心の中で呟いた。そして、さらに、

「だけど、俺にはできないが、耕太にはできる。耕太は俺よりもすごい奴だからな」

そう続けると静かに自分の部屋へと戻った。

第10話 僕にできること

ほぼ日の出と同じ時間に合わされた目覚ましのベルが三回鳴らずに止められた。そのこと自体はいつもの朝と同じであった。ただ違っていたのは、いつもは寝ている耕太を起こしていた目覚ましがり、起きている耕太に時間を知らせる役目が変わっていたことだった。

兄の正輝に言われて耕太は昨日の晩から考え続け、考えに考え、考え抜いた末に、何も思いつかないまま朝を迎えたのであった。

若いとはいえ慣れていない完全徹夜と、考えていたことの重さゆえにかなり衰弱して、目の下には大きくまを作っていた。耕太自身、顔を洗う時に鏡を見て、引いてしまうほどひどい顔だった。

「こんな顔と心で今日、美津紀と会う事になったらひどい事になる」
耕太はいつそ、今日は自分が休もうかと真剣に考えたが、いつもの習性のためか、着替えまで済ませて、台所に降りてきていた。

休んで一日考えるにしても朝ごはんは食べなくてはいけない。そう思って、台所に入った。

「おはよう。すごい顔だな」

なぜか台所にいる正輝に耕太は少し驚きつつ、朝食の支度にかかった。

「兄ちゃん、いつ寝てるの？」

「うーん、暇な時」

あつさりと答える正輝に耕太は「一生、この人にはかなわない」と真剣に思った。それから何の会話もなく、耕太はインスタントの味噌汁を作り、ご飯をよそった。

「で、何も思いつかなかったというわけか」

正輝の言葉に耕太は一瞬、手を止めた。

「それで今日は休みにして、一日考えるつもりなんだろう？」

耕太は正輝の指摘に半分以上、そう思っていたので素直に頷いた。
「そうか」

正輝がそう呟いた次の瞬間、電話がなった。腰を浮かしかける耕太を手で止めて、正輝が受話器を取り上げた。

「はい、遠野です。おはようございます。はい。まだ、耕太は寝ているので起きたら伝えておきますよ。はい。そうですか。わかりました。はい、わざわざありがとうございます」

丁寧でそののない対応をし終わると受話器を置いて電話を切った。「美津紀ちゃん、今日もお休みさせてもらって」

正輝の伝言に耕太は無意識にほっと息を吐いた。しかし、すぐにそれに気がつき、奥歯をかみ締めた。

「今日もいい天気になりそうだな」

落ち込んでいる耕太の前で正輝は能天気な声で外を見た。昇り始めた太陽が藍色の空を夏の空に変えていつている。

正輝はいつの間にか用意していたのか、弁当箱と風呂敷包みをテーブルの上に置いた。

「はい。これが弁当。こっちが着替え。学校の水泳部顧問の新垣先生に頼めばシャワーを貸してくれるはずだ」

「兄ちゃん……」

「世話をサボったら折角のバラがだめになるぞ」
「……うん。そうだね」

耕太は家の中で考えているよりもバラ園で手入れに没頭している方がいいと思った。バラ園の手入れに逃げていると言われてもいい。そう思うと、残りの朝食を胃にかきこんだ。使った食器を洗い桶に沈め、正輝の用意した二つの荷物をかばんに詰め込んだ。

「いつてきます！」

耕太はいつもと同じように元気に家を飛び出していった。たとえば、それが見かけだけであっても、いつもと同じように。

バラ園は昨日と変わらぬ姿で耕太を迎えてくれた。そろそろまぶしくなってきた太陽の光が朝もやを消し去り、一輪も咲いていないバラ園に光の花を咲かせていた。

「よしっ！」

耕太は気合を入れるため頬を両手で叩き、朝もやと共に心に溜まったもやを追い払った。

バラ園の手入れは土いじりだけではない。壊れかけたアーチやテラスを修復するのもあり、柵や柵を作る大工仕事もある。師匠である神崎社長から分けてもらったセメントでモルタルを練り、レンガを組んで花壇を増設したりする土木工事もある。

やらなければいけないことはいくらでもあった。

耕太は昨日の予定だった作業を片付け、今日の作業に休憩無しでそのまま突入した。一睡もしていないのでダルさは少しあったが、真夏の太陽の下では落ち込む気にもなれず身体を動かし続けた。

十時と三時に耕太の兄、正輝がスポーツドリンクとお菓子を差し入れに持って現れ、ほんの少しだけ作業を手伝って帰っていった。

「ありがとう、兄ちゃん」

「たまに土いじりもいいもんだな」

園芸などしたこともないと思っていたが、意外に正輝の手際が良く、耕太は「本当に、あんたは何者？」と舌を巻いた。もともと、手伝いが必要なことだけ手伝うとさっさと作業をやめて帰ってしまったが。

しかし、耕太にとってそんなことはどうでも良かった。とにかく身体を動かして作業に集中した。流れる汗と土の香りが耕太の身体を包み込み、全てを忘れさせてくれた。

「おい、遠野。シャワー浴びるんだったら、宿直室にいるから、言いに来てくれ。水泳部のシャワーはもう火を落として鍵閉めたから宿直室のを使わせてやる」

西の空が茜色に染まりかけた頃、痺れをきらせた水泳部の顧問の先生がバラ園に顔を出した。

「あ、はい。すいません。もう終わりますんで」

耕太は周囲が暗くなり始めている事に今更ながらに気がつき、泥だらけの手で顔の汗をぬぐった。あまり遅くなると道具を片付ける

のが一苦勞である。

耕太は今でも地面が暗くて見えにくいが、道具を拾い集め、片付けを始めた。

しかし、先生はバラ園の入り口で立ち尽くしていた。

「どうかしました？ 先生」

片付けにはしばらく時間がかかるのに、いまだバラ園の入り口で立ち尽くしている先生を不審そうに尋ねた。

「これ、お前一人がやったのか？」

「え？ はい……いえ。僕と、ミツキちゃん 友坂さんでやりました」

耕太はバラ園を振り返ってみて、胸を張って答えた。

（そう。僕とミツキちゃんをやったんだ）

以前とは見違えるように整備されたバラ園。ほとんど枯れていたバラを植え替えたり、復活させたり。割れたレンガを入れ替えたり、曲がった柵をまっすぐにして。

毎日毎日こつこつと少しずつ積み上げてきた努力の結晶。

「すごいな。本当に。お前がこのバラ園を修復するって言い出したときは、できないと思っていたが、やればできるもんだな。がんばったな、遠野」

本心から感心して感嘆の声を上げる先生に耕太はなんだか恥ずかしくなり、西の空よりも顔を赤くした。

「ミツキちゃんも手伝ってくれたから……」

「そうか。友坂も。お前たち、二人は本当にすごいな」

耕太からは逆光で先生の表情は見えなかったが、何かを含んだ声であつたことは十分にわかつた。

「はい。僕たちは最強コンビですから」

耕太は何もかも飲み込んで力一杯の笑顔で胸を張って自慢した。

「ああ、そうだな。それじゃあ、早く来い。あんまり遅くなると家の人心配する」

先生は素早く向きを変えると、足早に校舎の方へと歩き去ってい

った。多分、先生も知っているのだろうと、耕太は先生の態度を見て直感した。だけど、それは話してはいけないことで、誰とも共有できない秘密であることもわかっていた。

「先生も辛いだろうな」

まるで他人事のように耕太は呟いて、残りの道具を片付け始めた。汗が滴り、地面に落ちた。その汗がどこから流れたのかは耕太しか知らない。

二回目のベルで目覚ましを止めて耕太は布団から起きた。昨日の作業はどう考えてもオーバーワークであつたために全身が軽く筋肉痛に襲われたが、ちよくちよくあることなので騒ぎ立てはせずに着替えを済ませて下へと降りた。

結局、昨日一日作業に没頭して出た結論は

「僕にできることは何もないけど、ミツキちゃんと一緒にバラ園を世話して、最期までミツキちゃんの最強コンビの相棒でいることはできる」

吹っ切れたというよりも吹っ切つた。そんな感じであつた。

耕太は兄に教えてもらった一期一会という言葉は、自分が明日死ぬかもしれないことも言っているように思えた。そして、だから毎日を一生懸命に生きるとも。

「ミツキちゃんの残りの人生を一生懸命生きるのも、僕の残りの人生を一生懸命生きるのも同じことなんだ」

それがあっているのかどうかはわからないが、できることといえはそれだけで、それは今まで通りなのであつた。

「結局、兄ちゃんの手の平の上か」

耕太は最終的に出した結論が兄に言われたことと同じで少々不満であつたが同時に安心もした。

耕太が台所に行くと、やはり兄の正輝が濃い紅茶をストレートで飲んでいた。テーブルの上にはなにやら難しい専門書が広げられている。

「おはよう、兄ちゃん」

「おはよう。今日はいい顔してるな」

正輝は一瞬だけ視線を上げてにやりと笑うとすぐに視線を落とし、紅茶を飲みながら本を読み続けた。

朝食を終えた頃に電話がなったが、正輝は本に集中して出る気配を一向に見せない。仕方なく、耕太が受話器を持ち上げた。

「はい、遠野です」

「あ、コウちゃん？」

受話器から聞こえる明るい声に耕太は一瞬硬直した。吹っ切ったといえども頭の中だけである。実際に声を聞いたり姿を見れば、体が強張るのは仕方なかった。

それでも耕太はなんとか平静を保った。電話で相手に姿や表情が見えないだけ助かった。

「え？ あ、ミツキちゃん？」

「うん。おはよう」

「おはよう」

電話で話すのに少し不慣れな妙な間合いが流れて、照れ笑いでも浮かべるように美津紀が話を続けた。

「ごめんね、二日もサボっちゃって」

「いいよ。しかたないよ、風邪だったんだし。でも、もういいの？」

「うん。昨日もいけたんだけど、お母さんがだめだって、どうしても出してくれなかったの」

「夏風邪はこじらすと大変だから、ちゃんと治さないとね」

「コウちゃんもお母さんと同じこと言うのね。大丈夫よ。あたしの身体はあたしが一番知っているんだから」

「うん。そ、そうだね」

耕太は美津紀の台詞に過剰に反応しないように少し深呼吸するようにゆっくり答えた。

「そうだよ。ということで、今日から友坂美津紀、バラ園復活委員会に復帰します。よろしくね、会長」

「うん、よろしく」

「それじゃあ、学校」

美津紀が電話を切る気配を感じて耕太の頭の中にひらめくものがあつた。

「ちよつと、待って！」

「え？」

「あ、あの、僕、そち行くから、ちよつと待ててよ。すぐに行くし」

「え？ だけど」

不審がる美津紀に耕太は普段見せない強引さで押し通した。

「いいから、すぐに行くから」

「……うん。わかつた。じゃあ、待ってる」

「うん。すぐ行くよ」

耕太は受話器を置いて、本を読んでいる正輝を見た。

「兄ちゃん！ じ」

耕太の台詞が終わらないうちに正輝はキーホルダーを投げて渡した。彼愛用のママチャリの鍵である。耕太の愛用のマウンテンバイクにはない装備がついている。

「二人乗りするんなら絶対こけるなよ。死んでもこけるな」

本から視線を上げずに厳しい声で注意をした。美津紀の病名は不明だったが、血液関係の病気と予測はついていたので怪我させるのはどう考えても得策ではない。

「うん、わかつてる。ありがとう」

「それと、向こうに行くまでに二人乗りさせる理由を考えていけよ。俺との賭けとかな」

「う、うん。わかつた。ありがとう」

耕太は先まで読んでいる正輝にすごさを感じながらも、ゆっくりにしている時間はないと慌てて家を飛び出していった。

学校と耕太の家と美津紀の家とを線でつなぐと、ちょうど正三角形を描いている。どちらの家から学校へは三角形の一边を走れば

つくのだが、このとき、耕太は二辺を走って学校に行こうというのである。美津紀が電話の向こうで不思議がるのも無理はない。

耕太はできるだけ急ぎながらも、その理由を頭をフル回転させて考えた。考え事しながら自転車で全力疾走は大変危険な行為であったが、幸運の女神様にでも守られたか無事に美津紀の家に到着した。家の前では美津紀が既に外で待っていた。全力疾走と頭をフル回転したおかげで余計なことを考えることなく耕太は自然に手を挙げた。

「おはよう、ミツキちゃん」

「おはよう、コウちゃん。なんだか二日だけなのに久しぶりって感じがするね」

美津紀は照れたように笑った。

「そうだね」

「でも、わざわざこっちに来るなんて。借りてた図鑑だったら持っていくつもりだったのに」

美津紀はかばんの中から花言葉図鑑を取り出そうとした。

「しばらくは使わないから持っていていいよ」

「そうなの？　じゃあ、なんで？」

それを聞いて美津紀はますます不審そうに耕太を見た。あらかじめ言われていなければ、今頃、墓穴を掘っていただろうと耕太は兄の先読みに感謝した。

「ちよつとね。兄ちゃんと賭けをする事になったんだ」

先読みしてもらっても結局いい案が浮かばなかったので、兄のヒントをそのまま借用することになったのだが。

「賭け？」

「うん。この間、言ってただろ？　兄ちゃんにお金を借りてるってアレを帳消しにしてやってもいいって言われたんだ」

「ほんと？　正輝お兄ちゃんがそんなこというなんて信じられない！」

美津紀は自分の知っている耕太の兄、正輝の人物像からその台詞

が出るとは心底、信じられなかった。

「確かにね。でも、その代わり、夏休み最後の日に家から二本杉の丘まで自転車で三十分以内で行けたらって条件付なんだ」

二本杉の丘は近くにある丘で、高さはさほどではないが高低差があり、道路の勾配もきつい。普通に行けば四十分でも速いほうであった。

「三十分。かなり無茶ね。ということは行けなかったら？」

「兄ちゃんの大学の学園祭で売り子をさせられる。もちろん、ただ働き。借金もそのまま」

「無謀な賭けね」

美津紀は時々、遠野兄弟は賭けをするのは知っていたが、毎度あきれさせられると心の底からあきれた。

「ということで、トレーニングのために毎日、ミツキちゃんの家に寄って脚力を鍛えようと思うんだ。協力してくれる？」

「協力って言っても、朝、待てばいいだけでしょ？」

「できれば僕の自転車の後ろに乗って欲しいんだ」

「え？ 二人乗りは違反よ」

「うん。わかつているけど、夏休みが終わるまでの間だけでいいから。絶対こけないように安全運転するし」

耕太は必死に拝み倒した。あまりに必死で拝まれるので美津紀は正直迷った。

「うーん……」

「お願い。僕の借金を帳消しにできるチャンスなんだ、ミツキちゃん！」

「もう、しかたないわね。いいわよ。乗ってあげる」

「本当？」

「相棒にこれほど頼まれて断れると思う？」

美津紀は苦笑しながら自分の自転車を置き場に戻した。

「ありがとう、恩に着るよ」

美津紀は耕太の自転車の後ろに横のりして、片手を荷台、片手を

耕太の腰に巻きつけた。落ちないようにしっかりと身体を密着させる美津紀に耕太の心臓は自転車をこぐ前に破裂寸前にまで脈拍数が上がった。

何度か密かに深呼吸をして、鼓動を落ち着かせると耕太は平常心で首をまわして後ろを向いた。

「それでは、出発いたします、姫」

「うむ。よきにはからえ」

ノリのいい返事にお互い笑いあうと耕太は前を向いて自転車をこぎ出した。

第11話 二つの笑顔

バラ園を二日ぶりに見た美津紀はその様子に目を丸くした。そして、次の瞬間、うなだれた。

「どうかしたの、ミツキちゃん？」

耕太は落ち込む美津紀に気分が悪くなったのかと心配になり、その顔を覗き込んだ。

「コウちゃん、やっぱり、あたし、邪魔かな？」

美津紀は悔しそうに呟いた。

「そんなことないよ。とっても助かってるよ。ミツキちゃんがいなかったら、ここまでできなかったよ」

「だけど、あたしがいない時の方が予定より進んでるじゃない。それって、今まではあたしが邪魔してるせいでしょ」

美津紀は耕太を睨みつけた。耕太はその言葉に何を落ち込んでいるのか納得して、困ったように頭をかいた。

「そんな事あるはずがないじゃないか。一昨日は半分ぐらいしか進まなかったんだよ」

「うそよ。それが本当なら、昨日は二日半分は進んだってことじゃない。どっちにしても、進んだ事には変わりないわよ」

「違うよ。実を言うと昨日は兄ちゃんが手伝ってくれたんだ」

「正輝お兄ちゃんか？」

美津紀は意外な顔をした。よほどイメージからかけ離れていたのだろう。「嘘」と否定するよりも顔全体で信じられないという文字を浮かび上がらせていた。

「ひまだったんだって。滅多にやらないのに僕より手際がいいんだから嫌になるよ」

耕太は、嘘は言っていないと自分に言い聞かせ、笑ったつもりだったが、苦笑になった。その苦笑が真実味となったのだろう。美津紀はしばらく考えるように無表情になってから微笑んだ。

「まあ、正輝お兄ちゃんだからね」

「仕方ないよね」

誤解が解けたところで耕太は作業を始めた。病み上がりということで理由をつけてなかなか作業をさせない耕太に「もう大丈夫だって言ってるでしょう！」と美津紀が何度も怒って文句を言うことが繰り返されたが、最後には耕太の方が加減を覚えて、美津紀の怒鳴り声が少なくなった。

「さて、こんなものかな？」

耕太は真上に差し掛かった太陽を感じて、作業の終了を宣言した。作業時間は長かったものの、のんびりとやったのでいつもと同じ程度の進捗具合であった。

美津紀はさすがに二日のブランクで身体が鈍っていたのか、少し辛そうにしていたが、決して弱音は吐かなかった。

耕太は美津紀の顔を見て噴出した。それに少しムツとして彼を睨みつけた。

「なによ、失礼ね。身体が少し鈍っていただけよ」

「ちがうよ。片付けはやっておくから顔洗ってきたら？ 泥だらけだよ」

耕太はそう言って、わざと自分の顔の汗を土のついた軍手で軽く拭いて、顔に泥をつけて見せた。美津紀は弱音を吐かなかったが、汗はいつも以上に吹き出て、それを無意識に土のついた軍手で拭いていたのだ。結果、彼女の顔はそのまま密林ゲリラの迷彩で使用する模様をつけていた。

それに気がついた美津紀は見る見る顔を赤くした。

「行ってくる」

恥ずかしさで短くそう言うと、タオルを引っつかんで洗面所に向かった。顔を洗うだけなら園芸用の水道で充分だが、顔についた泥が完全に落ちたか確認するための鏡がここにはない。

「でも、途中で人と会ったら、その方が恥ずかしいんじゃないかな？ ここで泥を落として、洗面所に確認に行けばいいのに」

耕太はくすくすと笑いながら走っていく美津紀の後姿を見送った。笑っていた耕太はふと、自分が自然に笑えて、いつも通りに美津紀と話している自分に気がついて驚いた。あんなに悩み苦しんだのに、こうして普通にできるのは不思議だった。

全て納得したわけでもないし、完全に吹っ切ったわけでもない。なのに、なぜ？ その理由は頭ではわからなかったが、耕太はなんとなく身体でわかった。

言葉にする事はできない、目にも見えない

「絆ってやつなのかな？」

耕太は美津紀が戻ってくるまでに片づけしないと思い出して、道具を集めて洗い出した。

「コウちゃん、何してるの？」

顔を洗って戻ってきた美津紀はカメラを構えて、バラ園を撮影している耕太に声をかけた。

「作業日誌に写真を貼っておこうと思って。時々、兄ちゃんに借りて撮ってたんだ」

日々の作業は地味なだけに変化はやはり乏しい。しかし、まとまればそれなりに変化する。変化した事を見れば、やはり気合が入るのが人情というものである。

「へえ」

そう言いつつ、美津紀は何か考え事をしながらバラ園を撮っている耕太を見つめていた。

「そのカメラ、レンタル料とか取られてるの？」

「まさか！ 兄ちゃんもそこまで鬼じゃないよ。空いている時は使っていていいって言われたんだ」

耕太は美津紀の質問に「兄ちゃんならそれもありえるよな」と思っているながらも首を横に振った。

「ふーん。それじゃあ、さあ。明日も持ってこられる？」

「うん。たぶん、大丈夫だと思うよ。何かあるの？」

「じゃあ、お願いね。　　そうだ。明日は学校に持ってくる荷物があるから、お母さんの車で送ってもらおうと思ってるの。だから、特訓、付き合えないけど、いいかな？」

美津紀はかわいくお願いのポーズをした。耕太はそのかわいさに顔を赤くして、曖昧に返事をするのが精一杯であった。美津紀はそんな耕太を尻目に鼻歌を歌いながら、道具の片付け忘れがないかをチェックしはじめていた。

次の日の朝、耕太は兄の正輝にカメラを貸してもらい学校へと向かった。

「でも、なんだって、フルセットで持っていけなんて」

カメラ本体以外に重たい望遠を含む交換レンズ三本、本格的な三脚、簡易携帯用レフ板、ストロボまでつけている。

「これじゃあ、カメラマンの助手だよ」

耕太は重いカメラバッグが肩に食い込むのを感じて、ため息をついた。文句を言う耕太に兄は「女心というもんだ。後悔しないように黙ってもっていけ」と家を出るまで監視して持っていかせたのであった。

バラ園では、既に美津紀は到着しており、その横にはどこか海外にでも旅立つつもりかと言いたくなるような大きな旅行カバンが置かれていた。

「おはよう、コウちゃん」

美津紀が耕太を見つけて、明るく朝の挨拶をすると、カメラの重装備を目に留めて、にんまりと笑った。

「こ、これは」

「さすが、コウちゃん。わかってるう。やっぱり、あたしたちは最強コンビだね」

美津紀は言い訳しようとした耕太に上機嫌でオッケーサインを出した。そのサインの理由が理解できず、耕太は目を白黒させていたが、美津紀は感心したように頷いていた。

「いったい、なんなんだ？」

耕太は心の中で呟いて、必死に理由を探った。ここで美津紀に理由を聞けば、逆鱗に触れるのは間違いない。感心しているだけにその落差による怒りはいつも以上だろう。

ヒントは、美津紀の旅行カバン、自分のカメラの重装備。旅行に行くわけではない。ここで何かする……。

耕太は必死に考えたが、焦っているせいか考えがまとまらない。

「コウちゃん、今日の作業は水遣りと病気にかかっていないかのチェックだけだったよね？」

「う、うん。そのつもりだけど」

「じゃあ、それが終わってからお願いね」

美津紀はそう言って、スキップでもしかねない勢いで水をやるためのホースを準備にかかった。

「まずい！ 非常にマズイ！」

タイムリミットは作業終了まで。しかも、そんなに時間はかからない。病気のチェックを入念にして時間を稼げなくもないが、それでは美津紀の機嫌は悪くなるだけである。

耕太は八方塞で美津紀に正直に訊こうかと腹をくくって、カメラバッグを日陰の水のかからない場所に置いた。時間稼ぎのささやかな抵抗として、カメラバッグの中身を確認するふりをしてバッグを開けた。

最終ヒント『誰でも簡単 プロのように撮れるポートレート写真丸秘テクニク集 これであなたもポートレート名人』。

べたなタイトルの写真雑誌の付録小冊子が開けたバッグの一番上に入っていた。

「あつ。わかった！」

それを見た耕太は思わず、大きな声を出してしまった。

「な、なに？ コウちゃん？」

耕太の声にびっくりした美津紀が驚いて駆け寄ろうとしていた。

「な、なんでもないよ。宿題の問題の解き方を思いついたただだよ。」

うん、それだけ」

耕太は慌てて、小冊子を隠して首を横に振った。美津紀はそれでも怪訝な表情を浮かべてこちらを見つめている。

「さあ、早く作業しよう。バラも水を待ってるし、あんまり日が高いといい写真が撮りにくいよ、ミツキちゃん」

「そうね」

美津紀は納得して、水やりに戻っていった。耕太はそれを見ながらそつと小冊子をバッグに戻して、チャックを閉めた。

「あぶなかった。兄ちゃん、感謝」

耕太は素直に兄に感謝して、美津紀と一緒に水やりを始めた。

予定通り作業が終わると美津紀は着替えるためにカバンを持って運動部の部室へと向かっていった。前もって水泳部のシャワーを使わせてもらう約束をしていたのだろう。着替えにはしばらく時間がかかる。美津紀はすまなさそうに耕太に謝った。

しかし、その時間は耕太には天の恵みであった。その間に小冊子を急いで読み込んだ。知っていることもあったし、知らないこともある。できることもあるし、機材や条件でできない事もある。しかし、ポートレートを撮る知識は最低限、知ることができた。

一通り目を通してあげば、撮影中わからなくなってもまた見ればいい。さっきは思わず隠したが、別に隠す必要はなかったのである。逆にプロではないのだから、そういう本を持ってきたことはおかしい事ではなかった。

耕太はカメラのセットを済ませるとぼんやりとバラ園を眺めた。

青々とした葉が生い茂り、元気がよさそうなバラたちである。秋に備えての剪定をして高さが低くなっているが、それだけに力が見えなびているようにも見える。三番花をつけるかもしれないというバラの木も生育は順調である。

「なんとか間にあって欲しい」

耕太は真剣に思った。たとえ秋のバラが全滅してもいい、三番花だけは間に合って欲しい。園芸の神様に心から祈った。

「おまたせ、コウちゃん」

祈りを捧げているちょうどその時、耕太は誰かに声をかけられた。耕太はその声のする方を見て、息を飲んだ。

淡いピンクのノースリーブのワンピースに、お嬢様のようなツバの広い帽子をかぶった美津紀が立っていた。少し照れたような微笑みを浮かべたその姿は耕太には女神のように見えた。

「どこか変かな？」

美津紀はスカートの裾を翻しながら不安そうに前後を確認した。

その姿に耕太は悩殺された。

「いや、とつても……とつても綺麗だよ、ミツキちゃん」

耕太は顔を真っ赤にしながら、照れくさかったが正直に感想を口にした。

それを聞いて、美津紀の方も顔を真っ赤にして俯いた。

「あ、ありがとう、コウちゃん」

撮影はグクシャクしながらも始まった。しかし、シャッターを切るたびに緊張が解けはじめた。耕太も冗談を飛ばすようになり、美津紀も心から笑っていた。スカートの裾がバラの刺に引っ掛かったりするなどのハプニングもありながら、撮影は順調に進んだ。

「もうすぐバッテリーが切れちゃうよ」

バッテリー残量の警報表示が点灯し、耕太があと数枚しか撮れないことを美津紀に伝えた。

「せっかく乗ってきたのに」

美津紀は残念そうに呟くと気を取り直して、最後の数枚に気分を切り替えた。

バラ園の中でもお気に入りの場所、三番花が咲く可能性のあるバラの前に美津紀が立つと、夏にしては爽やかな風が一阵吹き抜けた。風で帽子が飛ばないように押さえつつ、気持ちのよい風に穏やかな微笑を浮かべた。それは何か儚げで、どこかに消えてしまいそうなそんな表情にぞくりとして、耕太は美津紀が消えてしまわないように思わずシャッターを切った。

「もう、コウちゃん！ 変なところ撮らないでよ」

美津紀は突然シャッターを切られて文句を言った。

「ごめん。すごくいい表情してたから、つい……」

「もうっ、上手いんだから。いつのまにそんなお世辞いえるようになったのよ。本物のカメラマンみたいよ」

美津紀は耕太に向かってはじけるような満面の笑みを浮かべた。

耕太は「これこそが、ミツキちゃんだ」とシャッターを切った。そして、そこでバッテリーが切れたことを知らせるアラームが鳴った。「最後の二枚だったのに、変な表情ばかり撮って」

美津紀は最後に二枚がいたくご不満と文句を言ったが、耕太の心の中では最後に二枚がベストショットであった。

「だけど、ラストのほうが好きだな」

甲乙捨てがたい仕上がりになると予想しながら心のフィルムを現像して耕太はポツリと呟いた。

「何か言った？」

「なんでもないよ。さあ、帰ろう。ミツキちゃんはお母さんに電話しないとイケないんじゃないの？」

耕太は誤魔化すと、美津紀も深く追求せずに携帯電話を取り出して迎えにきてくれるように電話を入れた。

第12話 希望の蕾

最初に蕾を見つけたのは美津紀であった。

見つけた途端、「コウちゃん」を連呼しながら作業をしていた耕太を強引に理由も話さずにその蕾のところまで引つ張っていった。

「ねえ、ねえ、ねえ！ これ、蕾じゃない？」

耕太は美津紀が指差した先を見た。「まさか」と思ったが、確かに蕾であった。しかし、その蕾のあるバラの木は発育もよく、元氣もあつたのに二番花を咲かせなかった。条件が何か悪かったのかと、耕太を残念がらせていた木であった。

「返り咲き……か？」

「返り咲き？」

美津紀はオウム返しに首を傾げた。

「一定の間隔で花を咲かせる四季咲きと違って、返り咲きは気紛れに花をつけるんだよ。育成条件で変化するから不規則で予想できないんだ。でも、この品種は四季咲きだけど、そういうのじゃないのに……」

耕太は首を傾げた。咲かないと咲かないで頭を悩まし、咲いたら咲いたで頭をひねらす。随分と人を振り回すバラの木だと園芸の奥深さを感じてた。

「いいじゃない。そういうこともあるわよ。きっと、これも神様のくれたごほうびよ」

美津紀はうきうきとした声でそういうと中断していた作業を再開した。

「この種類は確か、花が開くまで二週間ぐらいだったはず。花は中輪の淡いピンクだったな。香りのきつくない、明るくてかわいいバラ……」

耕太は頭の中の図鑑を広げて、花の映像を思い出していた。ふとその花が先日的美津紀の写真と重なった。

なんとも言えない気持ちが湧き上がって耕太は泣きそうな気分になった。だが、ここで泣くわけにはいかない。いざとなったら目に土が入ったと言って言い訳しようかと考えていると、冷たいものが頭にかかった。

「うわっ！　なんだ？　水？　雨か？」

豪快にぶつかけられた水に雨を疑って空を見上げたが、上空は水色の空が広がっていた。水色の水が落ちてきたわけではない。こんなに豪快なキツネの嫁入りも聞いたこともない。あと、考えられるのは

「ミツキちゃん！」

耕太は立ち上がって振り向いた。そこには引きつった笑顔の美津紀がホースの先から水を滴らせて立っていた。

「ごめーん。だって、そんなところでボーっとしているとは思わなかったんだもん」

最後の方は堪えきれずに美津紀は笑い出していた。

「このっ！」

耕太は水を張ったバケツを掴むと水撒きの要領で手で水をすくって美津紀に向かって水をかけた。

「きやつ！　濡れちゃうじゃない！　コウちゃん」

「人をびしょ濡れにしておいて！　不公平だ」

美津紀はきゃあきゃあ言いながら楽しそうに逃げ回った。耕太もそれを楽しそうに追いまわした。少しこぼれた涙も美津紀の水で洗い流された。永遠に続く夏的一幕のように時間を忘れて二人はじゃれあった。

「ちょこまかと、こしゃくな！」

「へへーん、そう簡単に濡れませんよーだ。下手くそ」

「このー。言っただ。えいつ！」

耕太はバケツに半分ほどになった水を一気に撒き散らした。美津紀は完全に避けきれず、ほんの少しだった水がかぶった。

「きやつ！」

悲鳴を上げるとともに美津紀はその場に倒れた。耕太は「やった！」と声を上げようとしたが、倒れた美津紀を見て血の気が滝のようになり引いた。

いつも通りにしすぎて、彼女が病気であったことをすっかり忘れていた。

耕太はバケツを放り投げて美津紀の側に駆け寄り、倒れた彼女を抱き起こした。彼女はまるで死んだように重たく、全体重が抱えた彼の腕にのしかかった。ぐったりとした彼女に彼の血の気はさらに温度を下げて、真夏だが凍りつかんばかりになった。

「ミツキちゃん！ ミツキちゃん！ ミツキ！」

激しく揺り動かしたが反応はない。耕太はどうすればいいかパニックになり、目に涙があふれた。

「ミツキちゃん！ ミツキちゃん！ こんな嫌だ。こんな嫌だよ！」

彼は泣いた事で少し冷静さを取り戻した。

「そつだ、救急車！ 携帯を！」

携帯電話を取るために彼女のもとを離れようとしたが、その手を誰かにつかまれた。

耕太はつかまれた腕にはっとして振り返ると、地面に寝かせられた美津紀が半身を起こして彼の手を握っていた。

「うそだぴょーん」

悪戯っぽく美津紀が笑っていた。そして、それでいて寂しそうに嬉しそうだった。

「うそ……」

耕太はその場に文字通りへたりこんだ。それは、まるで張り詰めていた緊張の糸が切れたマリオネットのようだった。

「もう、コウちゃんたら本気で泣くんだもの。びっくりしちゃうじゃない」

美津紀は完全に起き上がると、自分の顔に落ちた耕太の涙をいとおしそうに拭って、その指を胸の前に抱きしめた。

「うそ……」

「そう。迫真の演技だったでしょう？ アカデミーものよ」

美津紀は得意げに胸を張った。耕太は顔を伏せてゆっくりと立ち上がった。

「冗談でも……冗談でもしていい冗談と悪い冗談があるんだ！ こんな冗談、冗談じゃない！ もう二度とするな！ したら絶交だ！ほんとに本気で絶交だからな！」

耕太は普段、絶対に発する事のないくらい大きな、厳しい声で美津紀を怒鳴った。その迫力は耕太をよく知っている人間なら信じられないくらい本気で怒っているものであった。

「ご……ごめんなさい……」

美津紀は迫力におされて、神妙な顔で謝った。耕太はそれに黙って頷き、作業を再開した。その日はそれからお互いに一言も会話もせずに重苦しい空気のまま作業を終了した。

夕方に降った天の恵みでその日の夕方の水やりは中止になった。

その雨も日が沈む前にあがって、雨に空気中のゴミが洗い落とされ夕焼けがやけに澄んでいた。藍色の空の上に雲が茜色に染め上げられ、どこか非現実的な風景を作っている。その風景にアクセントをつけようと茜色の空には金星がさんと輝いて、藍色の空には昇りかけの満月が顔を覗かせていた。

雨のおかげで気温が少し下がり、過ごしやすい夕刻、しかも、水やりの手間が省けて楽ができた嬉しはずだった。だが、耕太は今日ばかりは間の悪い雨だと恨めしく思った。

「はあ〜」

耕太は何度となくため息をついた。夕方の水やりが中止というのは頼み込んで、兄の正輝に電話をしてもらった。兄の話では向こうも電話に出たのは母親だったらしいが、自分でかけるべきだったと反省していた。

「うっとうしい奴だな」

延々とため息をつき続ける耕太の頭を正輝は読んでいた雑誌を丸めて木魚を叩くように叩いた。

「だって、今日は最悪の一日だったんだよ。一期一会とは程遠い」
叩かれても反撃せずに耕太はされるがままになっていた。

「なんでも完璧にできるんなら人間やめて神様にでも転職しろ」

「できないから人間やつてるんだよ。兄ちゃんじゃあるまいし」

「じゃあ、完璧にできないのは諦めろ」

「兄ちゃん、それは向上心がなさすぎると思うんだけど」

「完璧を目指すのと、完璧なのは、越えられない壁があるんだよ。過去の失敗を反省して完璧を目指すことはよいことだけど、過去の失敗にとらわれて完璧でなかったものを後悔するのは最悪なことだ」

正輝はコードレス電話の子機を耕太に差し出した。

「それはわかってるけどさー」

耕太は正輝の正論と子機に背を向けた。

「勝手にしろ」

これ以上は面倒見きれないと正輝は耕太の部屋を出て行った。耕太は最大のきっかけを逃してしまったと後悔したが、もうそれは後の祭りであった。

「はあ」

その日、何度目かわからないため息をついた。

落ち込みつつも胃袋は別の人格が支配しているのか夕食を綺麗に平らげ、なんとか美津紀と仲直りする方法を考えようとした時、玄関のチャイムが鳴った。

母親が対応に出て、そのまま玄関の方で盛り上がっていた。耕太はどうせ近所のおばさんが何かを持ってきたついでに話が盛り上がったのだらうと、気にも留めずに自分の部屋へと戻ろうとした。

「耕太！ 耕太！ お客さんよ。美津紀ちゃんが来てくれたわよ」
階段をあがりかけるその時に声をかけられ、思わず落ちそうになりながらもなんとか堪えて踏ん張った。そして、そのまま玄関に急

行した。

「ミツキちゃん?!」

「あ、あ、あの、こんばんは、コウちゃん……」

美津紀はいきなりダッシュで登場した耕太に驚いて、しかもかなり緊張しながら挨拶した。

「あ、うん。こんばんは、ミツキちゃん」

挨拶をかわして微妙な沈黙になった二人を変に勘違いした耕太の母親は「邪魔者は馬に蹴られてしまふ」といいながら奥へと引っ込んでいった。

「……あの、今日は、ごめんなさい。あたし、どうかしてたんだと思う」

長い沈黙の後、美津紀はなんとかその言葉を口にした。まるで、捨てられた子供のようなその不安さを漂わせる声に耕太の胸は締め付けられた。

「あ、いや、いいよ。わかってくれたんなら」

「ありがとう、コウちゃん」

美津紀は少し目を潤ませながら笑ってお礼を言った。その笑顔に耕太も自然と微笑んだ。そして、再び沈黙が流れた。今度の沈黙はさっきのものとは違う、心地のよい沈黙だった。

「あの、これ、あたしが焼いたの。あんまり上手くできなかったけど、でも味は保障つきよ」

美津紀は手に持っていたナプキンをリボンでくくってラッピングした小さな袋状のものを耕太に手渡した。ナプキン越しの感触からクッキーが何かとわかった。

「ありがとう、ミツキちゃん」

「うん、それじゃあ、あたしはこれで。夜遅くにごめんなさい。おやすみなさい」

美津紀はほっとした表情で頭を下げると玄関のドアに手をかけて帰ろうとした。

「美津紀ちゃん、久しぶり。しばらく見ないうちに美人になったね」

帰るタイミングを見計らっていたかのように正輝が玄関に現れた。

「あ、正輝おにい　正輝さん。ご無沙汰してます」

美津紀は帰るのを中断して頭を下げた。ちよつと頬が赤くなっていたのを見て、耕太は少し膨れた。

（なんで、兄ちゃんが出てくるんだよ）

「昔みたいに呼んでくれたらいいのに。他人行儀だよ。まあ、それはそうと、夜道を女の子一人で歩いて帰らせるなんてことはしないよな？　耕太君」

正輝は耕太の手にもっている包みをひょいと取り上げると軽く背中を押した。

「あ、当たり前だろ！」

耕太は迂闊にもそのことを忘れていたが、当然そのつもりだと胸を張って返事した。

「じゃあ、しつかりやりたまえ、ナイト君。くれぐれも月夜の晩といつても送りオオカミに変身しないように」

「なるか、バカ兄ちゃん！」

怒鳴りながらも耕太は靴をはいて、夜道のボディーガードの準備を完了していた。

「じゃあ、行こう、ミツキちゃん。このままここにいたら、兄ちゃんに襲われるから」

「そつだぞー。襲っちゃうぞー」

ふざけた正輝に美津紀は声を立てて笑い、再び一礼して、今度こそ本当に玄関から外に出た。

第13話 美津紀の夢と耕太の夢

夏の夜空を星が瞬いていた。このあたりは比較的、空気は綺麗な方であるがそれでも見える星の数は少ない。しかも、今日は満月で空全体が淡い光を帯びているように見えるのでなおさらであった。

しかし、星が程よく省略されているので夏の大三角形がわかりやすく頭上に輝いていた。

美津紀は耕太の家まで自転車で行って来ていたが、それに乗らずに耕太と共に自転車を押して歩いていた。

他愛のない話をしながら二人で歩く夜道はいつもと違って新鮮だったのか、今日の夕方までの鬱囲気が嘘のように話が弾んだ。

「あ、この公園。昔、コウちゃんと良く遊んだよね」

住宅街の外れにある小さな公園。そこが耕太と美津紀が幼稚園のころ、定番の遊び場の一つであった。

ブランコと滑り台と砂場。それとベンチが二つ。シンプルな公園だったが、子供の二人には十分な遊び場であった。

砂場で砂山を作り、ベンチを使っておままごとをし、滑り台をジェットコースターのように滑り降り、力いっぱい遊んだ。

中でもブランコは二人の大的お気に入りだった。二人はいつもそれをこいで空をつかもうとしていた。力いっぱいこげば、大きくなれば、きっとブランコが空に届くと信じていた。

「ねえ、ちよつと寄っていかない？」

美津紀は耕太の返事を待たずに自転車を止めて公園へと入っていた。

こんな時間の小さな児童公園である。公園に人影はなかった。

美津紀はお気に入りだったブランコを見つけると踏み板に溜まった水を払って腰掛けた。鎖が鳴り、揺らすと少しきしんだような、耳につく音がした。

耕太も同じようにブランコに腰掛けた。昔と同じ、二人が勝手に

決めた専用ブランコ。美津紀が赤の踏み板、耕太が青の踏み板。二人は赤い彗星、青い稲妻と名乗って、ブランコを誰よりも高くこいでいた。

「あかいすいせいはい、つうじょうのさんばいのすぴーどで、こげるのだ。ばびゅーん」

美津紀は幼稚園時代の決め台詞をわざと舌ったらずの口調で再現すると軽くブランコを揺らした。

「兄ちゃんが教えてくれた台詞だね、それ」

「気に入って、いつも言ってたよね。正輝お兄ちゃんに意味を聞いたら、三倍がんばったら三倍幸せになれるってことだって教えてくれたけどね」

もちろん、今は元ネタは知っている。美津紀は座ったままブランコをこぎ始めた。

「兄ちゃんは昔から兄ちゃんだから」

耕太も苦笑しながらブランコをこぎ始めた。

「そうだね。コウちゃんも昔からコウちゃんだし」

「ミツキちゃんも昔からミツキちゃんだよ」

耕太は笑って言い返した。

「なーんだ。あたしたちって、あの頃から何にも成長していないんだね」

「そついうことになるね、悔しい事に」

「そうだね」

しばらく会話が途切れ、静寂の中、ブランコをこぐ音だけが夜の公園に響いた。

「あたしね、夢があるの」

美津紀が唐突に話を始めた。耕太はその言葉に危うくバランスを崩すところであつたが平静を装ってブランコをこぎ続けた。

「夢？」

「うん。あたしね、将来、ファッションデザイナーになりたいの」「ファッションデザイナー？ パリコレとかの、あれ？」

「そう、それ。だから敬信学院に行きたいと思ってるんだ」

敬信学院は歴史と伝統のある被服部 通称ファッション部と呼ばれるクラブがあり、かなりのレベルの高い活動をしていた。クラブの発表の場である学園祭にはお忍びで現役で活躍しているデザイナーも見に来るほどであった。もちろん、その卒業生でトップクラスで活躍しているデザイナーも多くいた。

「そっか……」

「それから大学にいったデザイン勉強を本格的にして、留学するの。そこで修行して、目標はパリでファッションショーをするの。世界中が注目するような大きなショーを」

美津紀はひときわ大きくブランコをこいだ。まるで夢をつかもうとしているように。

「なれるよ。きつと、ミツキちゃんならなれるよ。僕が応援する」

耕太も負けずにブランコをこぎながら大きな声で断言した。

「ありがとう。コウちゃんにそう言ってもらえたら、百人力よ。最強の相棒が応援してくれているんだもの。なれなきゃ、うそだよ」

美津紀も大きな声で応えた。

「そうだよ。なれなきゃ、うそだよ」

「あたしががんばるね。きつとファッションデザイナーになってみせるから。ファッションショーするときは見に来てね」

「うん。きつと行くよ。きつとなれるよ」

「ありがとう。ねえ、コウちゃんの将来の夢は？」

美津紀はあいかわらずブランコをこぎながら耕太に訊いた。

「僕の夢？」

耕太はそんなこと考えた事もなかったので何を言っているかわからなかった。

「そう、コウちゃんの夢も聞かせてよ。あたしばかり応援されてたら相棒じゃないでしょ？ あたしもコウちゃんの夢を応援する。だから教えてよ」

美津紀は隣でブランコをこぐ耕太の方を向いてにっこり笑った。

その笑顔に耕太は胸が張り裂けそうになった。全てをぶちまけたくなつた。

「僕の夢　僕の夢は……」

ミツキちゃんと一緒にいること。

そういえば、どれだけ楽だろう。しかし、言えない。絶対に言えない。

耕太は全ての思いを飲み込んだ。

「僕の夢は、園芸家になって綺麗な花で世界中を満たすことかな？」

「うわー、あたしより壮大な夢ね。でも、コウちゃんらしくて素敵な夢ね」

美津紀は耕太の夢がスケールの大きいことに感心して目を輝かせた。人が語る夢を決して馬鹿になどしない。大きくても、無理に思えても。それが友坂美津紀という少女であつた。

「ありがとう、ミツキちゃん。……誰もが元気になるような、嫌な事があつても、挫けそうになつても、前に進む元気をくれるような……そんな花を育てたいんだ」

耕太はこの場で考えた口からでまかせのつもりでいたが、実は以前からぼんやりと考えていたことだったことに気が付いた。そして自分で喋つていながら内心、驚いていた。

「うん。コウちゃんなら、きっとできるよ。というか、コウちゃんにしかできないよ。あたし、応援する」

美津紀はまるで耕太の夢がかなつたかのようにうれしそうに笑つた。

「ありがとう、ミツキちゃん」

「それじゃあ、どっちが先に夢をかなえるか競争ね」

「負けないよ」

「あたしもよ」

二人はお互いにしばらくにらみ合つて、ふっと力を抜いて、大声で笑いあつた。

そのあと見回りに来た警察官に注意され、夢の語り合いはそこで

終わった。

耕太は美津紀を無事に家まで送っていった。そして、美津紀の家から帰りも自転車には乗れなかった。ただ黙って、ハンドルを握り締め、にじんだ視界に映るいつもの道を歩いて帰った。

第14話 二人のバラ園

耕太はいつものように朝の支度を終えて、朝食をとっていた。朝食をとりながらも電話が気になって、何度か箸を止めては電話を見つめ、ため息については朝食を再開するということを繰り返し返していた。

それというのも一昨日から美津紀はバラ園の世話を休んでいた。理由は前回と同じ夏風邪であった。今度は長引きそうだから行けるようになったら電話をすると美津紀の母親から言われたのであった。もちろん、夏風邪が嘘ということは知っている。しかし、長引きそうというのは真実だろうと思った。

休む前の美津紀は明らかに体調が悪そうであった。少しの作業でもすぐに息があがって辛そうで、肩で息をしていることはしょっちゅうであった。顔色も悪く、夏の色彩豊かな太陽の下で見ると寒気すら憶えるようであった。

耕太はふと「長引かなかつたら？」という考えが頭をよぎり、懸命に頭を振ってその考えを追い払った。

「そんなこと、あるはずがない。バラだってあと三日もすれば咲くんだ。それまでに元気になってやってくるに決まってる」

耕太は誰にでもなく、自分に強く言い聞かせるように大きな声で独り言を言った。むしろ叫びに近かった。

しかし、心の底で渦巻く不安はぬぐいきれず、その「あと三日」を長く長く感じさせた。そして、押し寄せる不安が耕太の心にさざなみを浮かべ苛立ちを募らせていった。

どこにもはけ口のない怒りを奥歯にぶつけ、強くかみ締めた。電話の音が鳴ったのはちょうどそんな時だった。

耕太は今までで一番素早く受話器を持ち上げた。

「もしもし、遠野ですけど!」

「……あー、びっくりした。いきなり出るんだもん。」

コウちゃ

ん？」

電話機の向こうでは驚きつつ苦笑を浮かべている美津紀が耕太の脳裏にありありと浮かんだ。

「うん。ミツキちゃん。おはよう」

「おはよう」

そう言ったままお互いに黙り込んでしまった。言いたいことはお互い色々あるが、何一つ言えない。そんな沈黙であった。

「……あのね、コウちゃん。コウちゃんにわがまま言ってもいい？」

美津紀は何か探るように耕太に問いかけてきた。

「なんだよ急に改まって。いつもわがままは言ってるじゃない。そんなふうの前振りされたら構えちゃうよ」

耕太は冗談っぽくそう応じた。いつもそうするように。

「あははは。そうだね。あたし、いつも、コウちゃんにわがまま言ってたよね」

「それで、ミツキ姫。今日はどのような『僕の楽しみ』でもある姫のわがままを聞かせていただけるのですか？」

「もう、コウちゃんたら……」

美津紀はさっきの少し寂しそうな笑いではなく、微笑を浮かべるよう呟いた。

「あのね。あたし、バラ園が見たいの」

「うん。わかった。それじゃあ、迎えに行くよ。待ってて」

耕太は頷いて、電話を切った。

美津紀の家の前に耕太が着くと美津紀は以前撮影した時に着ていたワンピース姿で玄関前に立っていた。

「またコウちゃんの特訓に付き合えるね。賭けに勝たなくちゃ、借金地獄だもんね」

「うん。ミツキちゃんが協力してくれて、ありがたいよ。絶対に賭けに勝つからね」

耕太は美津紀を自転車の後ろに乗せると、ゆっくり慎重に走らせた。夏の早朝、風を切って走る自転車は静かに風景に溶け込んでい

た。二人の間に会話がなかったが、落ちないようにしっかりとつかまったお互いの体から伝わる鼓動をお互いに感じていた。それだけで充分であった。

「もう、こんなに膨らんでいるんだね」

バラ園についた美津紀は自分が最初に見つけた蕾を見た。もう花弁がこぼれて緩やかに開きかけている。

「あと三日もすれば開花すると思うよ」

「三日か……」

美津紀はじつと蕾を見つめながら呟いた。

「もっと早く咲けばいいのにね」

耕太は少しじれたような声で呟きに応えた。

「焦っちゃ、だめ。そう教えてくれたのは、誰だっけ？」

美津紀はゆっくりと立ち上がりながら意地悪そうに笑顔を見せた。

「そいつは僕に似た誰かだよ」

耕太は膨れてそっぽを向いた。

「じゃあ、あたしの知っているコウちゃんはそっちのコウちゃんね」

「ふーんだ」

耕太はわざとむくれた。美津紀はその様子に満足して微笑むと踊るような足取りでバラ園を散策した。あっちこっちの植え込みを覗き、他の蕾も見回った。耕太はその様子を黙って眺めていた。まるで白い蝶が飛び回っているようだった。

「ねえ、コウちゃん。やつぱり、あたし、ここが好き」

あらかた見て回ると美津紀は耕太の方を振り返ってとびっきりの笑顔を見せた。

「どうしたの急に？」

「一番好きな場所ってどこなってると思ったら、ここが浮かんだの。だから確認しにきたの」

「そりゃあそうだよ。ここはミツキちゃんが手塩にかけた場所なんだもの」

「コウちゃんもね」

美津紀は嬉しそうにはにかんだ。

「うん。僕たち、最強のコンビが手塩にかけたバラ園だもの。一番の場所になるのも当然だよ」

「そうね。そうよね」

美津紀は大きく頷いた。

「これからよろしく、ミツキちゃん」

「こちらこそよろしく、コウちゃん」

二人はお互いに握手した。

耕太は再び美津紀を自転車に乗せて、ゆっくりと走らせた。美津紀の家の前には心配そうに彼女の両親が待っていた。

「ごめんなさい。お父さん、お母さん」

「いいのよ、美津紀」

美津紀は父親に抱きとめられるようにして自転車を降りた。そして、父親から身体を離して、一人で立って、耕太に向き直った。

「バイバイ、コウちゃん」

「またね、ミツキちゃん」

耕太はいつになく真剣な顔で『またね』と強く言って、しばらく黙っていたかと思うと、かばんからバラ園の作業日誌を取り出した。「一昨日と昨日、作業の状況を知らないと手伝う時、困るだろ？今度、会ったとき返してくれたらいいから」

美津紀に無理やり手渡した。

「……うん。ありがとう、コウちゃん」

美津紀はゆっくり頷いた。そして、顔を上げた顔はどこか晴れやかだった。耕太は自転車にまたがって学校へと向かって走り出した。

「またね、コウちゃん！」

耕太の後ろから美津紀の元気のいい声が聞こえた。

「またね、ミツキちゃん！」

耕太は身体をひねって手を振って元気のいい声で別れの挨拶をした。

最終話 美津紀のバラ

二日後の朝、どこか秋の空を思わせるような抜けるような青空が広がる一日の始まりだった。

いつものように耕太は朝の支度をしていると電話が鳴った。

一瞬、耕太は硬直したが、落ち着いて受話器を持ち上げた。

電話は美津紀の母親からのものであった。内容は、今朝早く、美津紀が眠ったとのことであった。今まで耐えてきたものが我慢しなくてよくなつた彼女の母親は悲しみと涙を隠さずに耕太にそのことを伝えた。

「コウちゃんと呼ばないでって、あの子が、美津紀がどうしてもって。ごめんね、耕太君。ごめんね」

美津紀の母親は何度も耕太に謝った。耕太は美津紀が何故自分が呼ばなかったのかわかるような気がした。

「だって自分だって、そうならミツキちゃんを呼びたいとは思わないから」

耕太は電話の向こうで泣きくれている美津紀の母親を優しく慰めた。

「あの子、今度、コウちゃんに会ったら、バイバイって言っちゃうからって……」

「ミツキちゃんらしいや。本当に」

あとはほとんど美津紀の母親は泣き声だけだった。しばらくして、落ち着いたのか美津紀の母親は通夜の場所と時間、葬儀の時間を伝えて電話は切れた。

「美津紀ちゃん、か？」

いつの間にか台所に降りてきていた正輝が耕太に訊いた。耕太は黙って頷いた。

「そうか」

正輝は目を閉じてしばらく黙祷した。

「母さんには俺が言つといてやる。お前は行くところがあるんだろ？」

正輝の言葉に耕太は頷くと、かばんを持って出かけていった。

耕太はバラ園にいた。

美津紀の見つけた蕾が満開の花を咲かせていた。ピンクがかった白いバラであった。そんなに大きくない中輪の花なのに、元気一杯で勢いは大輪の花に負けていない。耕太は剪定ばさみを持って、その花を摘み取ろうとした。

しかし、それにはさみを当てて、あとは指を握るだけでいいのに、それができなかった。耕太はいつの間にか、そのバラの花の姿に美津紀の姿を重ねていた。

「いいよ、コウちゃん。無理しなくても。もう、ちゃんと貰ったから」

そんな声が聞こえた気がして、耕太ははさみを花から離れた。そして、ただそこに立ち尽くしていた。

美津紀の葬儀には大勢の人が参列した。

クラスメイトはもちろんのこと、彼女と友達という別のクラス的女子も大勢駆けつけた。もちろん、男子の数も多い。耕太と同じクラスの男子も何人か見かけた。

葬儀の会場中をすすり泣く声が止むことはなく、友人代表で弔辞を読んだ女子たちは読みきる事ができず、泣き崩れてしまった。誰もが心痛な表情を浮かべていた。

そして、輝くように笑った美津紀の遺影が更に涙を誘っていた。

その写真は耕太がバラ園で撮ったものだった。家族の誰もが病気のことを知ってしまった後では美津紀の写真を撮ることが遺影を想像させ、シャッターを押せなかった。それ以前の写真でも耕太の写真ほど美津紀らしさが撮れているものはなかった。

あまりにもしめやかな葬儀に、葬儀屋の社員も「若い人の葬儀は辛い」と会ったこともない美津紀の死を心から悼んでいた。

しかし、そんな中、耕太はいつもと変わらぬ表情と態度であった。男子の中にも涙を流しているものもある。それなのに、ともすれば冗談すら飛ばしている耕太に美津紀の親友という女子たちが詰め寄っていった。

「ちよつと、遠野君！ あなた、美津紀と仲が良かったんでしょ？ 幼なじみだったんでしょ！」

少しヒステリックな声が葬儀を終えて散り始めている人のざわめきの間に聞こえた。

「うん、そうだよ」

「じゃあ、なんで泣いてあげないのよ！ 美津紀はね、美津紀はあなたのバラ園を手伝うようになってから、あたしたちと会ったびに、コウちゃんが、コウちゃんが、楽しんでるにあなたの事を話してたのよ。仲良かったんでしょ？ 好きだったんでしょ！」

女子は平然としている耕太にますます腹を立てて怒鳴った。まるで耕太が美津紀を殺したかのように責めた。

「うん。好きだよ。今でも」

耕太は微笑みを浮かべて答えた。

「なんで笑ってられるのよ！ 信じられない！」

美津紀の親友たちはまた泣き崩れた。しかし、耕太はただ微笑むだけしかできなかった。

葬儀も終わり、人がほとんどいなくなった会場から帰ろうとした耕太を美津紀の母親が呼び止めた。そして、耕太が美津紀に貸していたノートを彼に返した。

「あの子、病院までそれを持って行って一生懸命読んでいたわ。元氣になって手伝う時に困るからって、最期まで手放さなかったの。」

美津紀は、本当に耕太君と会えて幸せだったと思うの。ありがとう、耕太君」

耕太は美津紀の母親の言葉に首を振った。

「僕の方こそ、ミツキちゃんに会えて幸せです」

「ありがとう、耕太君」

美津紀の母親と父親、弟にまで頭を下げられ、困ったような微笑を浮かべて、葬儀の会場を後にした。

耕太はまっすぐ帰るつもりだったが、なぜかバラ園へと足が向かった。このまま歩いていくとバラ園に行ってしまうことは気がついていたが、それを止めるつもりはなかった。

耕太はバラ園に入ると、かすかに香るバラの匂いに迎えられ、その中をただなんとなく歩いた。

夏休みの学校とはいえ、人は大勢いるし、周囲も住宅街で人通りも多い。普段はにぎやかなはずなのにその日の耕太には妙に静かに感じた。

「なんだか世界が止まってるみたいだ」

耕太は美津紀のバラの前に来て立ち止まり、しゃがみこんでバラを見つめた。そして、作業日誌にバラのことを書き込もうとページをめくった。

そして、今日書き込むつもりของページに封筒が貼り付けてあるのを見つけた。封筒の表書きには大きな元氣のよい字で

『コウちゃんへ』

と書かれてあった。

耕太は大きく一つ心臓が脈打ち、静かな世界を騒がせたが、すぐに元の静かな世界に戻り、機械的にその封筒を開けて中の便箋を取り出した。便箋は女の子が好んで使う少しファンシーなもので、丁寧に折りたたまれていた。

宝物のようにそつと便箋を広げて読み始めた。

コウちゃんへ

この手紙を読んでいるということは、あたしは遠くへ行ってしまうたということだね。

ごめんね。あたし、本当は自分が病気で長くないこと、知っていたの。でも、そのことを話したら、コウちゃんが気を使って、昔みたいに仲良くしてくれない気がして怖かったの。だから、黙ってた。

ごめんね。あたしって、身勝手だよ。自分の都合だけでコウちゃんをだまして。ごめんね。

あたし、病気のことを知ったときはショックで、すごく辛くて悲しくて、暴れて、泣き叫んだの。

「何で、あたしだけ」って。

お父さんやお母さん、勝昭にも、ずいぶんひどいことをしたと思う。あたしって、バカだね。誰も悪くないのに。

何日も泣いていたんだけど、急にあたし、怖くなったの。このまま、あたしは何もしないまま死んでしまうんじゃないかって。怖かった。本当に怖かった。でも、何をしたらいいかわからなかったの。そんな時、コウちゃんが楽しそうにあたしの家の前をスコップ持って通りがかったの。びっくりして、それで思わず声をかけたの。話を聞いて、あたしはこれだと思ったのよ。コウちゃんは神様がつかわしてくれた天使だと。ジャージ姿のやぼったい天使さんだったけど。

バラの世話、楽しかった。

コウちゃんとあんなふうに泥んこまみれになって遊んだのは何年ぶりかな？ 泥んこ細工じゃなくて、バラの手入れだったけど、それでも楽しかった。虫を取るのも……あんまり、できれば、やらなくてすましかったけど。楽しかった。神崎社長にほめられたのもうれしかった。おごってもらったジュースもおいしかった。

コウちゃんとゆっくりいろんな話できたのも楽しかった。小学校の二年からほとんど話さなくなったよね。おたがい変に意識しちゃってさ。でも、最後にたくさん話せたから、よかった。本当によかった。

いつだったか、あたしが気絶したふりをしたこと、憶えてるかな？ うれしかった。あたし、不安だったの。あたしが死んでも誰も悲しまないんじゃないかって。バカと思われるかもしれないけど、死んだ後なんてわからないから、すごく不安だったの。でも、ふざけて気絶したあたしを泣きながら呼びかけてくれたり、そのあと、

真剣に怒ってくれたり。うれしかった。あたしが死んでも、コウちゃんだけは絶対に悲しんでくれるってわかって。

でも、すぐに、あたし、とんでもないことしたって反省したのよ。コウちゃんを試すなんて、コウちゃんが悲しんでくれることなんてわかっていたことなのに。

あやまりにいった時、病気のこと、話そうかと思ったけど、やっぱりできなかった。怖くてできなかった。話したら、絶対さげられないことに、本当の本当になっちゃう気がして言えなかった。

あの時、公園で話した夢の話。あれ、本当だよ。もし奇跡が起きて、病気が治ったら、あたし、ファッションデザイナーになるの。その時は応援してね。パリでファッションショー開く時はコウちゃんをファーストクラスで招待してあげるから。あ、でも、この手紙を読んでるってことは、もう無理なんだね。あたしって、本当にバカだね。

コウちゃんの夢、かなうといいね。コウちゃんならきっと、みんなを幸せにするきれいな花を咲かせられるよ。だって、コウちゃんだもん。あたしも応援しているから。もう、あんまり、役に立てないけど、ずっと応援してるから。

バラ、キレイに咲いたかな？ 見れたら、書き直すつもりだけど、これをコウちゃんが読んでいるってことは、あたし、見れなかったんだね。残念だな。でも、つぼみが一杯ついてたし、きつと一杯きれいに咲いているよね？

あやまって、ばっかりだったけど、最後に ありがとう コウちゃん

コウ

ちゃんの相棒の 美津紀より

耕太は読み終わると、何かを堪えながら立ち上がった。手紙を優しく、力強く持って。

「たくさん、咲いたよ。毎日、一生懸命、世話したもんね。お水あ

げたり、草むしたり、悪い虫を追い払ったり……。ねえ、何か言
つてよ！　ずるいよ！　僕を一人置いていくなんて……。僕もだよ。
いっぱい謝りたいことあったよ。でも、一番言いたかったこという
よ。ありがとう、ミツキちゃん！　大好きだよ、ミツキちゃん！」
耕太は心の底から叫んだ。空を見上げて叫んだ。空の向こうの天
国に届くように。

了

最終話 美津紀のバラ（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。
よろしければ、感想などいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073s/>

いちごいちえ

2011年7月4日03時45分発行